

吉 原 遺 跡

— 都市防災総合推進事業に伴う発掘調査報告書 —

2017 年 2 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

吉 原 遺 跡

— 都市防災総合推進事業に伴う発掘調査報告書 —

2017 年 2 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

本報告書は、美浜町が実施する都市防災総合推進事業に伴い、平成 28 年度に実施した吉原遺跡の発掘調査成果を記載しております。

吉原遺跡は、紀伊半島西側中央部に位置し、太平洋に面する日高郡美浜町に所在しております。本遺跡は、現在では宅地化などが進んでおり一見わかりませんが、旧海岸砂丘上にあり、なかでも今回調査を行った地点は、当遺跡の中でも最も南東に位置し、南側に目を向けると近畿最大の松林「煙樹ヶ浜」が広がる海岸沿いにあたります。

吉原遺跡では、昭和 62・63 年度に、今回の調査地より北側で発掘調査が行われております。調査の結果、弥生時代中期前葉から古墳時代前期、奈良時代、平安時代などの土壙墓、弥生時代中期前葉から終末期の方形周溝墓などが確認され、弥生時代から平安時代にかけて長期間にわたる墓域であったことがわかりました。

今回の調査では、奈良時代から平安時代の土坑や中世から近世の火葬墓・土坑などが新たに発見されました。こうした結果と、これまでの調査の成果を合わせて考えると、この地域では、平安時代から江戸時代まで火葬が行われていたことがわかるとともに、墓域の立地は、弥生時代から平安時代、中世から近世に内陸から海側へと徐々に移り変わっている事もわかりました。

こうした成果が積み重なれば、各時代の砂丘の利用状況並びに埋葬習俗などといった美浜町の歴史の一端を明らかにすることができるものと考えております。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行に至るまで御協力いただいた関係諸機関並びに地元の方々に対して、厚く御礼申し上げます。

平成 29 年 2 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理 事 長 櫻 井 敏 雄

例 言

1. 本書は、都市防災総合推進事業に伴う吉原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、美浜町の委託事業として和歌山県教育委員会(以下、「県教育委員会」という。)による指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センター(以下、「当文化財センター」という。)が実施した。
3. 発掘調査及び調査報告書刊行にかかる体制は以下のとおりである。
発掘調査及び出土遺物等整理業務(平成28年度)
事 務 局 長(管理課長) 南 正人
埋蔵文化財課長 土井 考之
発掘調査・整理業務担当者 金澤 舞
4. 現地での遺構の実測は、調査補助員の補助を得て金澤が行った。写真撮影については、金澤及び当文化財センター職員が行った。
5. 出土遺物等整理業務は、当文化財センターで行った。
6. 遺物の実測・トレースについては整理補助員が行い、遺物写真撮影は金澤が行った。
7. 本書の第Ⅴ章を除く執筆及び本書全体の編集は、金澤が行った。出土人骨の同定は、公立大学法人大阪市立大学大学院 医学研究科 分子生体医学大講座 器官構築形態学 学術博士 安部みき子氏の御指導・御協力を得、第Ⅴ章に玉稿いただいた。
8. 発掘調査及び出土遺物等整理業務で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料は当文化財センターが、出土遺物は県教育委員会が保管している。

凡 例

1. 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル(基礎編)』(2006.4)に準拠して行った。
2. 調査及び本書で使用了座標値は平面直角座標系(世界測地系)第Ⅵ系、標高は東京湾平均海面(T.P.)の数値であり、単位はmを使用している。方位は座標北(G.N.)を用いた。
3. 本書で使用する土層及び土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局並びに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』(2010年版)に拠り記述し、土質は調査担当者の任意の判断で行っている。
4. 遺構番号は、調査区ごとに001から順に付与した。
5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は各挿図に明記した。また、遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。
6. 調査で使用了調査コードは、16-25・010(2016年度-美浜町・吉原遺跡)で、記録資料はこのコードを用いて管理している。
7. 本書掲載地図は、和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(平成28年12月1日現在)と、和歌山県が提供する『地理情報システム』「参照用マップ(城地図)数値地図」(1:5,000)に加筆して使用した。
8. 土器編年の参考文献及び本文中の註、参考文献は、まとめてP.18【註】、【参考文献】に記載している。

本文目次

第Ⅰ章 位置と環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 既往の調査	3

第Ⅱ章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	3
第2節 発掘調査の経過	4
第3節 出土遺物等整理事業の経過	4

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 地区割の設定	4
第2節 調査の手順	5

第Ⅳ章 調査成果

第1節 基本層序	5
第2節 調査の成果	
1 1区の調査成果	6
2 2区の調査成果	7
3 3区の調査成果	8
4 4区の調査成果	9

第Ⅴ章 出土人骨の分析

第Ⅵ章 まとめ	17
報告書抄録	巻末

挿図目次

図1 吉原遺跡の範囲と周辺遺跡分布図	2	図9 4区平面図及び土層断面図 (S=1/150)	11
図2 調査位置図	3	図10 4区個別遺構平面図及び土層断面図 (S=1/50)	13
図3 地区割図 (4m区画)	4	図11 4区下層 029 列石状遺構平面図及び土層断面図	13
図4 基本層序図 (1/100)	5	図12 4区出土遺物①	14
図5 1区平面図及び土層断面図、出土遺物	6	図13 4区出土遺物②	14
図6 2区平面図及び土層断面図 (S=1/150)	7		
図7 2区出土遺物	8		
図8 3区平面図及び土層断面図 (S=1/100)	8		

表目次

表1 人骨部位同定表	16	表2 出土遺物観察表	19
------------	----	------------	----

図版目次

写真図版1 1区	写真図版5 4区 (2)
写真図版2 2区	写真図版6 出土遺物 (1)
写真図版3 3区	写真図版7 出土遺物 (2)
写真図版4 4区 (1)	

第Ⅰ章 位置と環境

第1節 地理的環境

吉原遺跡は、紀伊半島西側中央部に位置し日高川河口右岸から日ノ御崎までの太平洋海岸に沿って展開する日高郡美浜町に所在する。美浜町は、東側に御坊市、西から北側にかけては日高町、南は広大な太平洋、西は紀伊水道に面しており、町全体の面積は 12.77km²と県内で2番目に狭く、気候は南海気候区と温暖である。

地形的には、町の西半は日ノ山（標高 201.6m）、西山（標高 328.7m）を含む白馬山塊及びその先端が海に没する切り立った岩石海岸から成る一方、東半は北東に入山（標高 76.0～78.0m）等の低山地が位置するものの、大半を日高平野が占める。この平野は、縄文海進以降、御坊市を主に流れる日高川と美浜町東側を南北に貫流する西川の沖積作用などによって形成されたもので、海岸に面する煙樹ヶ浜で名高い砂丘とその後背湿地により構成されている。うち、海岸砂丘はその形成過程から新旧2列あるものと推定されており、その境は砂丘上を走る県道柏御坊線とみられる。本遺跡は、こうした新旧2列の旧海岸砂丘上にまたがって立地しており、東西約 500m、南北約 120mの範囲に広がる。

第2節 歴史的環境（図1）

吉原遺跡が位置する日高平野は、平面積では和歌山平野に次ぐ県下2番目の広さを誇り、御坊市、日高町にもまたがる。そのため、本遺跡の歴史的環境を知るうえで御坊市及び日高町内に所在する遺跡についても重要であると考えられることから、必要に応じてそれらに所在する主要な遺跡についても触れることとする。

旧石器時代 美浜町内では、この時期の遺跡は確認されていない。周辺では日高川町に所在する河岸段丘上の松瀬遺跡で石器が、海岸段丘上の御坊市名田町壁川崎遺跡等で剥片石器やナイフ形石器が採集されており、県内でも古くから人々が生活していたようである。

縄文時代 御坊市塩屋町の尾ノ崎遺跡では早期から晩期の土器が出土しており、同市名田町馬地遺跡では中期初頭の土器が、日高川町の和佐遺跡及び松瀬遺跡でも早期から晩期の土器が出土している。いずれも、比較的高地に営まれている。一方、後期から晩期の美浜町田井遺跡や御坊市湯川町小松原Ⅰ遺跡は比較的低地にあり、海進海退現象に伴い居住域を変化させた様相が窺える。

弥生時代 前期には、3重の環濠を巡らせた集落である御坊市湯川町堅田遺跡が営まれた。中期前葉の集落は不明瞭であるが、美浜町の吉原遺跡で当該期から後期の方形周溝墓が確認されている。中期中頃には御坊市藤田町東郷遺跡、同市湯川町小松原Ⅱ遺跡、富安Ⅰ遺跡等が中心的な集落であったようである。いずれも平野部に営まれたが、中期末頃にはそうした集落は廃絶し、代わって御坊市湯川町亀山遺跡といった高地性集落が営まれるようになる。ただし、そうした様相も一様ではなく、東郷遺跡の集落は後期前半においても平野部にあり、日高川以南の御坊市塩屋町中村地区遺跡においても中期末から後期前半まで平野部に集落が営まれていたことが判明している。美浜町では、中期に堂ノ前西沼遺跡、後期に田井遺跡等があるが、そのほとんどが未調査であるため実態はよくわからない。農耕祭祀に使用されたとみられる銅鐸は、平野周辺で7個確認されており、外縁付紐式から突線紐式まで認められる。

古墳時代 前期では、搬入土器などが多く出土する東郷遺跡が中心的な集落であったようである。

中後期の集落にも、東郷遺跡、富安Ⅰ遺跡がある。日高川南岸に所在する尾ノ崎遺跡では、前期初頭から中期初頭の方形周溝墓群が確認されている。前期末から中期には、日高川北岸御坊市藤田町に円墳の阪東丘1・2号墳が築造され、南岸には中期古墳である岩内3号墳が築造される。後期には当地域唯一の前方後円墳である天田28号が築造される。その他、御坊市片山、富安、鳳生寺、亀山古墳群等といった群集墳が数多く形成される。美浜町では、後期に属する古墳が多く、入山、和田、本ノ脇古墳群が確認されている。終末期には、有間皇子の墓ともいわれる漆塗木棺や銀装太刀が出土した御坊市の岩内1号墳がある。

古代～中世 古代の日高川下流域は日高郡に属し、財部、内原、岩渕の3つの郷に比定される。堅田遺跡周辺では、奈良時代後半期の日高郡衙とみられる大規模な掘立柱建物群や古代瓦が確認されており、小松原Ⅱ遺跡周辺でも奈良時代から平安時代の日高郡衙と推定される掘立柱建物や古代瓦が確認されている。平安時代後期から中世の集落は、熊野街道沿いで確認された東大人遺跡や岩内Ⅰ遺跡がある。なお、日高川町小熊地獄山墳墓に奈良時代の火葬墓が確認されており、同市鳳生寺山にも室町時代とみられる火葬蔵骨器が出土していることから、当該期にはすでに仏教文化の伝来が認められる。美浜町では、和田Ⅱ遺跡で古代銭「貞観永寶」や緑釉陶器が出土しており、平安時代の墓域と推定されている。また、吉原遺跡では、平安時代に埋納されたとみられる松原経塚があり、文献で明らかでないが熊野御幸道の王子社に係る遺跡と推定されている。南北朝時代には、足利幕府の奉公衆である湯川氏が、小松原館や亀山城等を拠点として室町時代末期頃に日高をはじめ牟婁・有田まで勢力下に治めるものの、天正13年(1585)の羽柴秀吉の紀州攻めにより退転する。一方、手取城を拠点としていた玉置氏は帰順し所領の一部を安堵される。



【美浜町】10. 吉原遺跡 7. 和田古墳群 8. 和田Ⅰ遺跡 9. 和田Ⅱ遺跡 12. 松原経塚 13. 堂の前西沼遺跡 14. 吉原御坊跡 15. 田井遺跡 16. 西川遺跡 指4. 松原王子神社の社叢 【御坊市】28. 堅田遺跡 40. 善明寺窯跡 41. 小竹祝塚古墳 指1. 日高別院の公孫樹

図1 吉原遺跡の範囲と周辺遺跡分布図

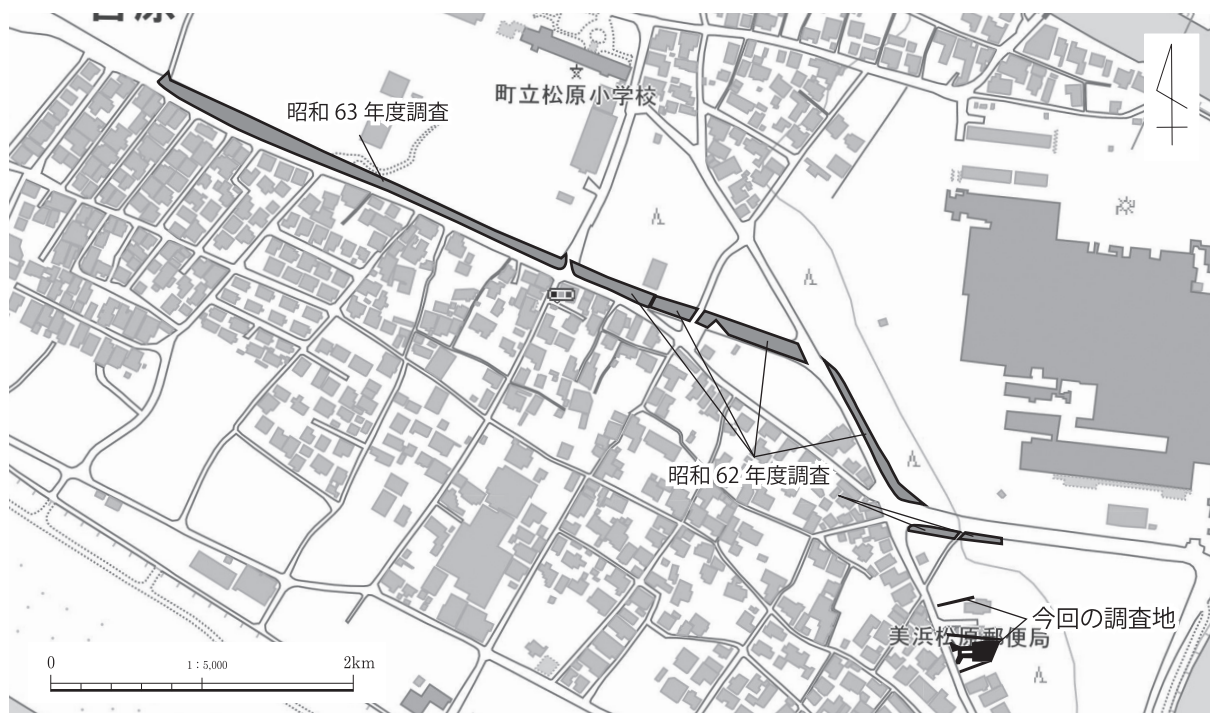


図 2 調査位置図

第 3 節 既往の調査 (図 2)

吉原遺跡では、今回の発掘調査対象地より北側において、昭和 62 年度及び昭和 63 年度に財団法人和歌山県文化財センターにより県道柏・御坊線改良工事に伴う発掘調査が実施された。調査面積は、延べ 3,300m²である。調査の結果、弥生時代中期前葉から古墳時代前期、奈良時代、平安時代などの土壇墓、弥生時代中期前葉から終末期などの方形周溝墓、時期不明の溝状遺構、小穴、その他不明遺構などが確認され、調査地は、弥生時代から平安時代にかけて長期間にわたり墓域として利用されたことが判明した。また、今回の発掘調査前には、当該発掘調査対象地にて県教育委員会により試掘確認調査が実施され、中世の火葬墓が確認された。

第 II 章 調査の経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯

平成 26 年 12 月に、美浜町教育委員会より県教育委員会に日高郡美浜町吉原における津波避難場所建設計画について協議され、工事対象地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である吉原遺跡に該当することが判明した。そのため、美浜町より県教育委員会へ文化財保護法に基づく通知が提出され、県教育委員会により吉原遺跡試掘確認調査が実施された。調査の結果、一部で中世の火葬墓が確認されたことから、県教育委員会より美浜町へ平成 19 年 3 月 28 日付け文第 548 号和歌山県教育委員会教育長通知「和歌山県における発掘調査を要する場合の取扱い基準」に基づき、記録保存調査が必要である旨の通知がされた。これにより、美浜町より依頼を受け、県教育委員会指導のもと当文化財センターが記録保存を目的とした本発掘調査を行うこととなり、平成 28 年 6 月 22 日に当文化財センターと美浜町で面積 406.2m²を対象とし、「都市防災総合推進事業に伴う吉原遺跡発掘調査等業務」として契約を行い、事業に着手した。

第2節 発掘調査の経過

事前に、国土交通省公共作業規程に準じた4級基準点測量を「吉原遺跡発掘調査に伴う基準点測量委託業務」として、平成28年7月28日から同年8月31日の工期で有限会社ヤマニシに委託し実施した。基準点測量は、世界測地系を基準とする3級基準点(NO.1、NO.2)を既知点とし単路線方式により実施し、調査地隣地に4級基準点を1点設置した。また、これとは別に引照点を1点設けている。水準点測量は、調査地周辺に設置されていたBMを既知点とし直接水準測量により観測を行い、基準点測量により設置した4級基準点に標高(T.P.値)を定めた。

発掘調査は、「吉原遺跡発掘調査工事」として日邦建設株式会社が請負い、平成28年8月4日から平成28年9月27日までの工期で実施した。発掘対象地は4箇所に分かれており、最も面積が広い4区から、1区、2区、3区と順次実施した。現地公開は、平成28年9月10日に行い、周辺住民ら約30名程度の参加があった。

第3節 出土遺物等整理作業の経過

出土遺物等整理業務は、「吉原遺跡出土遺物等整理業務」として当文化財センターが直営で実施した。業務期間は平成28年12月1日～平成29年2月17日までで、出土遺物数はコンテナ(28ℓ)5箱である。出土遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、鉄釘、寛永通宝、人骨等があり、整理作業として、遺物の洗浄、注記、登録、接合・補強、復元、実測、遺物遺構図面のトレース、遺物の写真撮影を行い報告書を作成した。

第三章 調査の方法

第1節 地区割の設定(図3)

調査区の地区割は国土座標第VI系(世界測地系)を使用し、吉原遺跡を網羅する南東に基点($X=-234,300\text{m}$, $Y=-78,900\text{m}$)を設け、その点から東西に大区画・小区画を設けて区割を行った。大区画は基点をA1地点と定めて、西方向へ100mごとにB、C、D…、南方向に2、3、4…という軸を設定した1辺100m四方の区画で、北東隅の地区名を用いてA1、C3などと呼称する。大区画の北東隅をa1地点として、そこから4mずつ西方向へb～y、南方向へ2～25とそれぞれの方向に25分割し、一辺4mの正方形区画を小区画とする。小区画は北東隅の地区名からa1区～y25区と呼称する。地区名は、大区画－小区画(A1－a1区など)で表す。今回の調査区は、大区画でJ9、J10の範囲内に相当する。

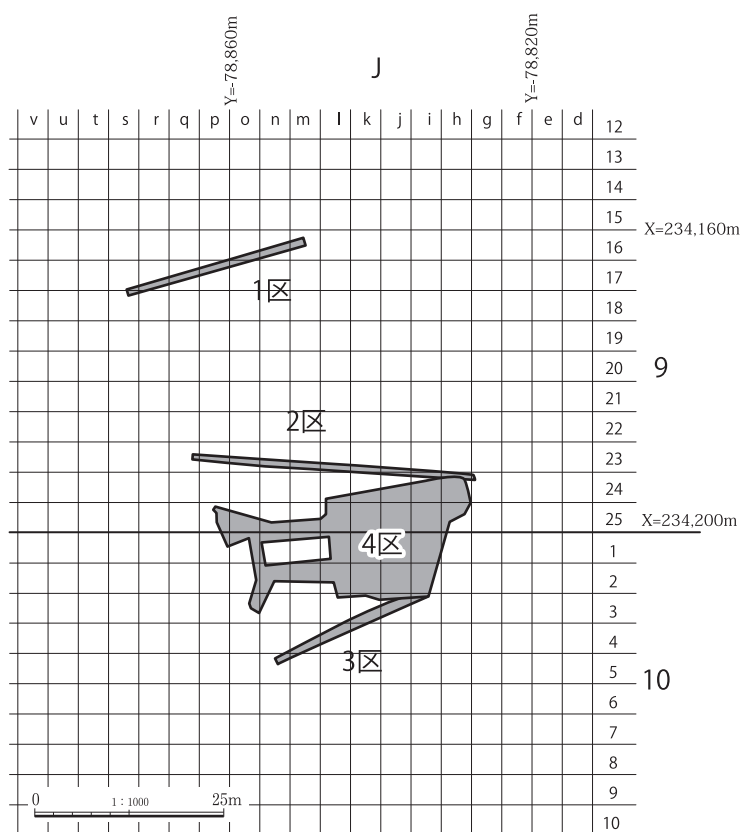


図3 地区割図(4m区画)

第2節 調査の手順

各トレンチの重機による掘削は、県教育委員会の試掘確認調査の結果より遺物包含層とされた第3層上面まで慎重に行った。その後、人力で第3層以下を掘削し、遺構の検出及び掘削を行った。遺構内埋土の掘削は、調査区壁面で土層堆積状況が確認できるものを除き、土層堆積を観察するため半裁し土層堆積を写真撮影及び実測して記録した後、全掘した。また、4区では第4層以下土層堆積状況の確認のため、中央付近にサブトレンチを設けた。写真撮影は、6×7判及び35mm判モノクロームフィルム、カラーネガフィルム、フルサイズデジタルカメラを用いて調査区全景及び土層断面、個別遺構写真等を撮影した。実測図は、調査区全体図及び土層断面図、遺構図等を作成し、全て縮尺 1/20 で作成した。

第Ⅳ章 調査成果

第1節 基本層序 (図4)

今回の調査地における基本層序は、県教育委員会の試掘確認調査成果を踏襲し次のとおり大別した。なお、調査区ごとに大別土層をさらに細別しているが、細別土層は調査区間で対応しない。

第1層：黄灰色、オリブ褐色、黒褐色～明黄褐色、明黄褐色、黒色等を呈する表土及び近現代の盛土等で、場所によって現代の遺物を多く含む。また、4区東壁土層第1-7層では、弥生土器が出土しているが、それ以下の層序から考えて遺物の年代が新旧逆転しており、調査区東側に位置する近世の新川掘削排水等に伴う後世の堆積土と判断した。

第2層：黒褐色～暗オリーブ褐色を呈するしまりや粘性の弱い砂層で、径1～2 cmの小礫を1 %程度含む自然堆積土と考える。遺物は、時期不明の土器細片を少量含む。

第3層：暗灰黄色～オリーブ褐色を呈するしまりや粘性の弱い砂層で、自然堆積土とみられる。
無遺物層である。

第4層：暗灰黄色～オリーブ褐色を呈するしまりや粘性の弱い砂層で、自然堆積土とみられる。遺構のベース面で無遺物層である。第3層と土色・土質いずれも極めて類似しているため、明確に分層することは難しい。

第5層：暗青灰色で、一部に橙色が混じるしまりや粘性の弱い砂層で、自然堆積土とみられる。
無遺物層である。

第6層：橙色やにぶい褐色～明褐色、明褐色を呈するしまりや粘性の弱い砂層で、自然堆積土とみられる。無遺物層である。

第7層：明褐色～褐色のしまりや粘性の弱い砂層で、自然堆積土とみられる。無遺物層である。

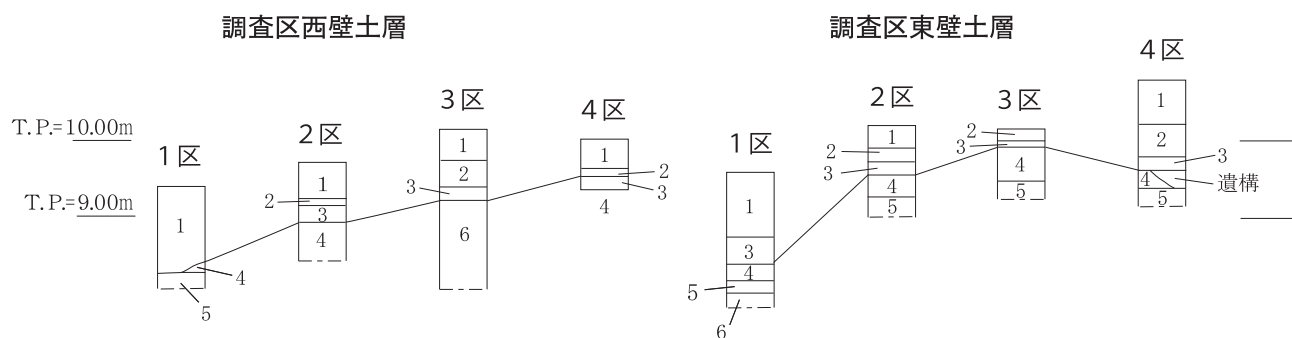


図4 基本層序図 (1/100)

第2節 調査の成果

今回の発掘調査対象地は4箇所に分かれており、最も面積が広い調査区を4区、その他は北側から順に1から3区とした。現状は、いずれも西側の海から風を防ぐために植えられた松林であり、一部で旧海岸砂丘の砂が露出していた。調査の結果、1区から4区の各調査区第4層上面で、奈良時代から平安時代の土坑、中近世の火葬墓・土坑、時期不明のピット等を確認した。また、4区では第4層以下土層堆積状況確認のためのサブトレンチで、中世以前とみられる列石状遺構を確認した。奈良時代から平安時代の土坑からは土師器、須恵器、黒色土器など多量の土器細片が出土し、中近世の火葬墓からは土師器小皿、鉄釘等鉄製品、古寛永銭、焼けた人骨片等が出土した。4区下層遺構である列石状遺構では、遺物は出土していない。以下、調査区ごとに調査区の状況や検出した遺構、出土した遺物等について詳しく述べる。

1 1区の調査成果(図5)

1区は、今回の発掘調査で最も北側に位置する調査区である。調査範囲は、長さ約23.4m、幅0.8~1.0m、面積約23.0㎡で、細長い長方形を呈する。現況地盤の標高は、調査区東端で約9.6m、西端で約9.4mと東から西に向かって緩やかに傾斜する。堆積土層は第1層、第3層、第4層、調査区東西の断割りで第5層、第6層を確認した。遺構は、第4層上面で火葬墓を2基(001、002)、ピットを1基(003)確認した。

001・002 火葬墓 001火葬墓は、一部調査区外へ広がるため全体の規模は不明である。遺構の検出長は約2.7m、深さは0.3mで、埋土はやや濃淡があるものの、黒褐色砂層単一砂層である。遺物は、埋土より鉄製品5点、多量の焼けた人骨片や炭が出土した。鉄製品のうち、4点は扁平な形状をしており、飾り等の金具の可能性がある(1)。

002火葬墓は、一部調査区外へ広がるため、遺構の北端0.1m程度を検出したにとどまる。長さは東西の攪乱等により不明であるが、調査区内で最大長1.4m程度とみられ、残存する深さは0.2mである。埋土は黒褐色単一砂層であるが、焼けた人骨片等遺物は出土していない。埋土の色調から、002も001同様に火葬墓と推定される。

003 ピット 006ピットは、検出径約0.25mで、出土遺物はない。

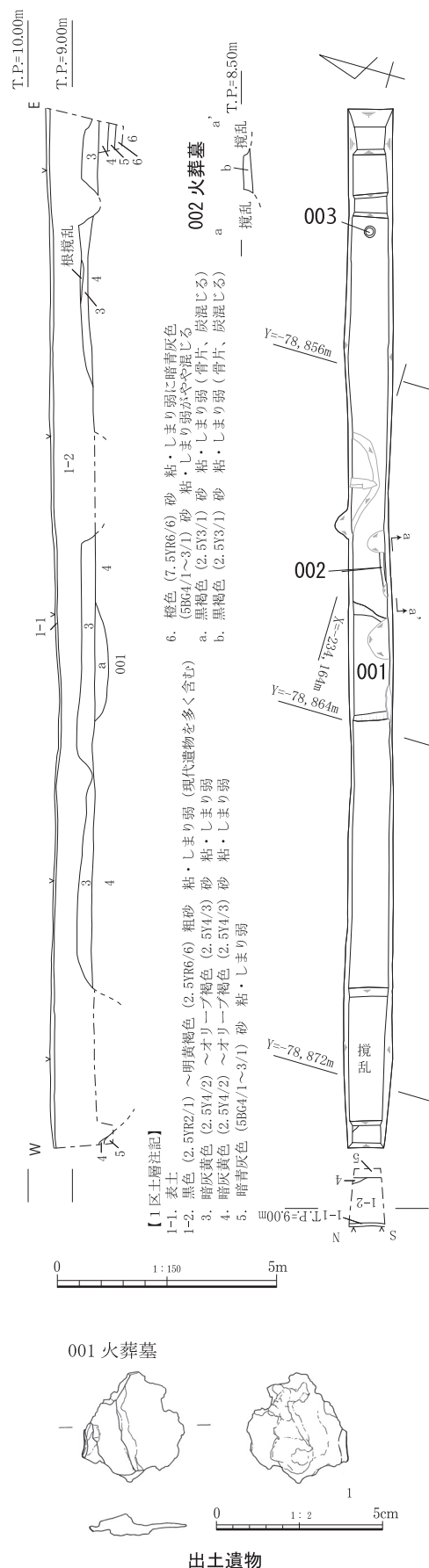


図5 1区平面図及び土層断面図、出土遺物

2 2区の調査成果 (図6、7)

2区の調査範囲は幅0.6～1.0m、長さ約37.3m、面積約37.0㎡で、細長い長方形を呈する。現状地盤の標高は調査区東端で10.2m、西端で約9.7mとなり、1区と同様に東から西に向かって緩やかに傾斜する。堆積土層は、第1層から第4層及び東西の断割りで第5層を確認している。遺構は、第4層上面で火葬墓5基(001～005)、ピット1基(006)を確認している。

001～005 火葬墓 火葬墓は、いずれも全体を検出出来たものではなく、全ての火葬墓が調査対象地外へと広がる。

001 火葬墓は、検出長約1.4m、幅約0.5m、深さ0.4mで、埋土は黒褐色を呈する砂層である。埋土からは、鉄釘15点、不明鉄製品8点、焼けた人骨片、貝殻片2点が出土した。鉄釘は、法量が明確にわかるもので厚さ0.2～0.3cm、長さ3.0～5.5cm、全て巻頭である(2～6)。一部打ち込み時に折れ曲がったものもみられる(6)。

002 火葬墓は検出長約0.4m、幅約0.1m、深さ0.24m、埋土は暗灰黄色の砂層で、土師器細片が1点出土した。焼けた人骨等は出土していないが、埋土から火葬墓の一部と推定される。

003 火葬墓は、検出長0.7～1.2m、深さ0.26m、埋土は黒褐色単一砂層である。埋土から鉄釘8点、不明鉄製品5点、焼けた人骨片が出土した。鉄釘は錆膨れがひどく明瞭でないが、法量は厚さ0.2cm程度、長さ4.0～6.0cm程度のものとみられる。

004 火葬墓は、検出長約1.7m、幅0.6m、深さ0.3m程度、埋土は黒褐色を呈する砂層で、焼けた人骨片、貝殻片が1点出土した。

005 火葬墓は、検出長約1.3m、深さ0.7mである。埋土は3層に分けられ、うち、最下層の第c層は、黒褐色砂層単一層で径2.6cmの古寛永銭1点(7)、焼けた人骨片や貝殻片を1点を含む。当火葬墓の時期は、古寛永銭の鑄造時期(1636～1659年)に鑑みて江戸時代と推定される。

006 ピット 006ピットは、検出径約0.25mで、遺物は出土していない。

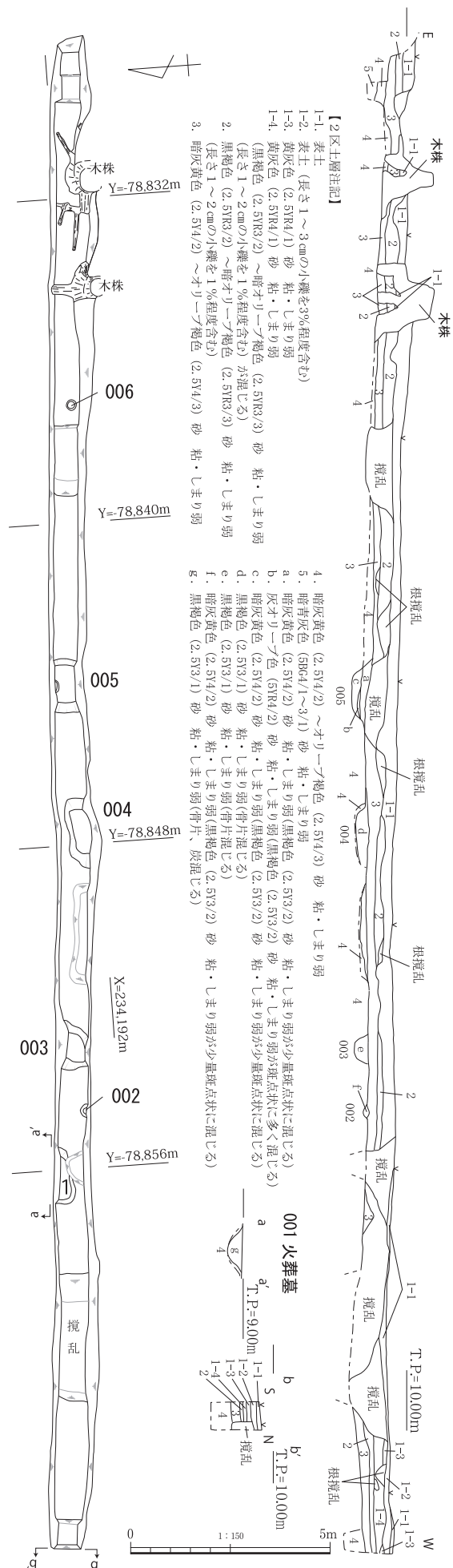


図6 2区平面図及び土層断面図 (1/150)

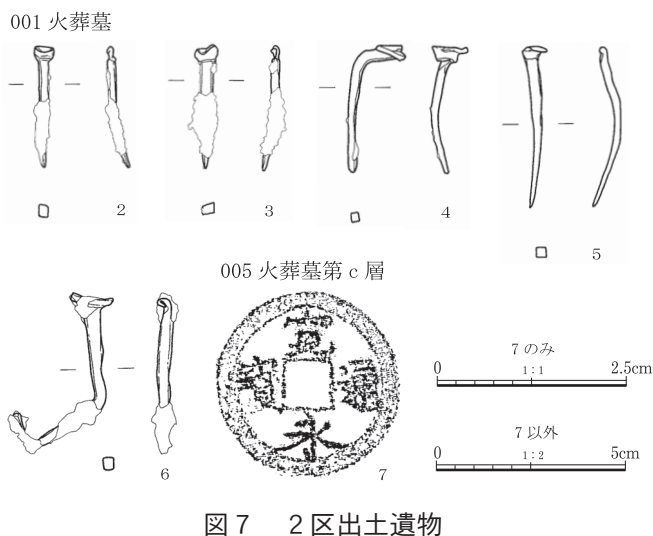


図7 2区出土遺物

3 3区の調査成果 (図8)

3区は、今回の発掘調査において、最も南側に位置する調査区である。調査範囲は幅約1.0～1.4m、長さ約20.8m、面積約27.0㎡で、東端が三角形を呈する細長い形状を呈する。現状地盤の標高は、調査区東端で約10.3m、西端で約10.3mとほぼ水平である。堆積土層は、第1層から第6層を確認した。遺構は、第4層上面で土坑2基(002、003)、火葬墓1基(001)を検出した。002、003土坑は、4区014、015土坑と同一のものと推定される。

002、003土坑 002、003土坑は、土層断面の切り合いから後者が前者より新しいと考えられる。

002土坑は、検出長1.2m、深さ0.4mで、埋土は明赤褐色を呈する砂層で、ややしまりが強い。埋土から黒色土器A類やいわゆる「多段横ナデ技法」による回転台土師器の細片等が出土したことから、当土坑の時期は平安時代と考えられる。

003土坑は、検出長3.9m以上、深さ0.5mであり、埋土は002土坑と同様赤褐色の砂層である。埋土からは、不明土器細片が多く出土した。

001火葬墓 001火葬墓は、調査区外へと続き、検出長約0.9m、幅約0.3m、深さ0.6m程度である。埋土は5層に分かれ、黒褐色土塊がブロック状に混じり褐色を呈する上層の第a層、第b層、焼けた人骨細片を含み黒褐色を呈する第c層、黒褐色土塊がブロック状に混じり褐色を呈する最下層の第d層がある。

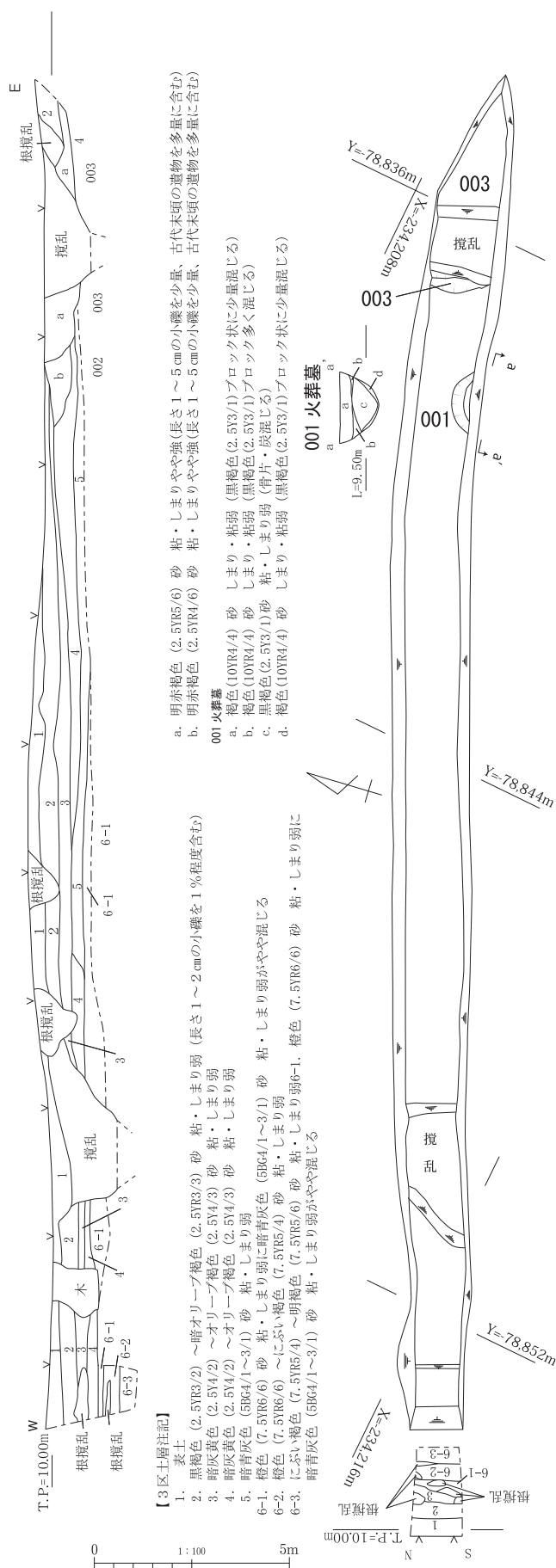


図8 3区平面図及び土層断面図 (1/100)

4 4区の調査成果 (図9～13)

4区の調査範囲は、長さ約34.0m、幅2.0m～15.5mで、面積290.0㎡と不整な形状を呈する。現況地盤は、調査区東端で標高約10.4m、中央部分で約9.8m、西端で約10.0mと東西から中央部に向かって緩やかに傾斜する。堆積土層は、第1層から第7層を確認した。遺構は、第4層上面で25基確認され、うち土坑は7基(014、015、024～028)、火葬墓は16基(002～006、008～010、016～023)、火葬土坑は1基(007)、ピットは1基(001)である。また、4区中央で第4層以下の土層堆積状況を確認するため、長さ4.4～8.1m、幅2.0～5.0mでサブトレンチを設定したところ、第7層上面で列石状遺構を1基(029)検出した。列石状遺構の遺構面まで工事の掘削が及ばないことから、検出した遺構に係る最小限の調査のみにとどめている。

014、015、024～028 土坑 014土坑は検出長約2.7m、幅約0.9m、深さ約0.3m、015土坑は検出長約2.6m、幅約0.5m、深さ約0.4mで、いずれも埋土はしまりがやや強い明褐色の砂層である。014土坑からは、黒色土器A類及びB類や不明土師器細片、貝殻片が出土した。

015土坑では、多段横ナデ技法を施す土師器片(8)や貼り付け高台をもつ土師器(9～11)、土師器甕(12・13)、黒色土器A類(14)、須恵器高坏脚部(15)等が出土した。また、出土遺物の中には、レンガの細片のようなものが認められ、混入の可能性がある。

024土坑は、検出長約1.0m、幅約0.4mで、埋土は褐色を呈し小礫を多く含む。埋土より、貼り付け高台をもつ土師器細片1点が出土した。

025土坑は、検出長約2.6m、幅約1.7m、深さ約0.3mで、埋土は褐色を呈し小礫を多く含む。埋土からは、多段横ナデ技法をもつ黒色土器B類細片等が出土した。

026土坑は、検出長約1.1m、幅約1.1m、深さ約0.2mで、埋土は2層に分かれる。上層は褐色の砂層で、土師器細片が出土した。下層は、オリーブ褐色の砂層で無遺物層である。

027土坑は検出長約1.2m、幅約0.7m、028土坑は検出長約1.2m、幅約0.7m、いずれも深さ約0.3mで、全形はわからない。ともに、埋土は明褐色の砂層で多量の不明土器細片が出土した。遺物には、土製の羽釜片(16)、黒色土器A類椀(17)、須恵器坏B蓋(18)、土錘(19・20)、その他外面にタタキをもつ須恵器甕体部細片や多段横ナデ技法の土師器細片等が出土した。

028土坑では、高台をもつ土師器片(21)、多段横ナデ技法をもつ土師器細片、土製の鍋とみられる土器片(22)、黒色土器A類椀(23・24)及びB類細片、須恵器壺体部片(25)、土錘とみられる土製品(26)、石錘(36)とみられる石製品等が出土した。

027土坑で一部奈良時代の遺物を含むが、その他の土坑は平安時代のものと考えられる。

002～006、008～010、016～023 火葬墓 002火葬墓は、検出長1.5m、幅0.8m、深さ約0.1mで、埋土は黒褐色単一砂層である。埋土からは、鉄釘が13点、焼けた人骨片、古寛永銭が3点出土した。鉄釘は、錆が少なく明確に法量がわかるものをみると、全て巻頭で、厚さ0.2～0.4cm、長さ2.4～7.0cmのものである(37～39)。古寛永銭は、3枚のうち2枚は重なり、癒着している。遺構の時期は、2区005火葬墓同様、江戸時代とみられる。

003火葬墓は、検出長約2.1m、幅約1.0m、深さ約0.6mで、埋土は黒褐色が混じる暗灰黄色からオリーブ褐色を呈する砂層である。埋土からは、鉄釘4点、不明鉄製品7点、焼けた人骨片が出土した。鉄釘は、錆により法量は不明瞭であるが、厚さ0.2cm程度、長さ4.0cmのもの、厚さ0.7cm、長さ7.4cmの厚いもの(40)がある。

004火葬墓は、検出長約0.9m、幅約1.0m、深さ約0.3mで、埋土は黒褐色が混じる暗灰黄色

からオリーブ褐色を呈する砂層である。埋土からは、鉄釘 3 点、不明鉄製品 2 点、焼けた人骨片が出土した。形状のわかる鉄釘は、巻頭で厚さ 0.2cm 程度、長さ 3.0cm 程度である。

005 火葬墓は、検出長約 1.2m、幅約 1.8m、深さ約 0.3m で、埋土は上下 2 層に分かれる。上層は、黒褐色が混じる暗灰黄色からオリーブ褐色の砂層で、下層は黒褐色の砂層である。下層からは、鉄釘 6 点、不明鉄製品 4 点、焼けた人骨片が出土した。鉄釘は全て錆膨れにより正確な法量は不明瞭であるが、厚さ 0.5cm 程度のものが 4 点、厚さ約 0.2cm 程度のものが 1 点ある。

006 火葬墓は、検出長約 1.4m、幅約 1.5m、深さ約 0.4m で、埋土は黒褐色単一砂層である。埋土からは、焼けた人骨片が出土した。

008 火葬墓は、検出長約 0.8m、幅 1.1m、深さ 0.3m、埋土は黒褐色単一砂層を呈し、口径 9.6 cm、器高 2.2cm で手づくね成形の土師器小皿 1 点 (29)、焼けた人骨片が出土した。土師器小皿の法量・調整から、遺構の時期は中世から近世と推定される。

009 火葬墓は、010 火葬墓と重複し、土層の切り合いから、前者が後者より新しいとみられる。009 火葬墓は、検出長約 0.4m、幅約 0.4m、深さ約 0.3m で、埋土は黒褐色単一砂層である。埋土からは、焼けた人骨片が出土した。

010 火葬墓は、検出面約 1.2m、幅約 0.9m で、埋土から復元口径 9.4cm、器高 2.3cm で手づくね成形の土師器小皿 1 点 (30)、厚さ 0.2cm、長さ 3.2cm で巻頭の鉄釘 1 点 (41)、不明鉄製品 4 点、焼けた人骨片が出土した。

016 火葬墓は、検出長約 1.1m、幅約 0.7m、深さ 0.1m で、遺物は出土していない。

017 火葬墓は、検出長約 1.8m、幅約 1.2m、深さ約 0.9m で、埋土は黒褐色を呈し、復元口径 9.4cm、器高 2.1cm で手づくね成形の土師器小皿 1 点 (31)、鉄釘 3 点、焼けた人骨片が出土した。鉄釘は、錆膨れのため不明確であるが、厚さ 0.2cm、長さ 5.0cm 以下のものが 2 点、厚さ 0.4～0.65cm、長さ 6.6～6.9cm の皆折鉄釘が出土した (42)。

018 火葬墓は、検出長約 2.0m、幅約 1.9m、深さ約 1.9m で、埋土は上下 2 層に分かれる。上

【4 区土層注記】

- 1-1. 表土
- 1-2. オリーブ黒色 (5 Y3/2) 砂 粘・しまり弱
- 1-3. 明黄褐色 (2.5 YR6/6) 砂 粘・しまり弱 (長さ 1～3 cm の角礫を 50% 程度含む)
- 1-4. 黒色 (2.5 YR2/1) 砂 粘・しまり弱
- 1-5. 黒色 (2.5 YR2/1) 砂 粘・しまり弱
- 1-6. オリーブ黒色 (5 Y3/2) 砂 粘・しまり弱
- 1-7. オリーブ黒色 (5 Y3/2) 砂 粘・しまり弱
- 1-8. オリーブ黒色 (5 Y3/2) 砂 粘・しまり弱
- 2. 黒褐色 (2.5 YR3/2) ～暗オリーブ褐色 (2.5 YR3/3) 砂 粘・しまり弱 (長さ 1～2 cm の小礫を 1% 程度含む)
- 3. 暗灰黄色 (2.5 Y4/2) ～オリーブ褐色 (2.5 Y4/3) 砂 粘・しまり弱
- 4. 暗灰黄色 (2.5 Y4/2) ～オリーブ褐色 (2.5 Y4/3) 砂 粘・しまり弱
- 5-1. 暗青灰色 (5 BG4/1～3/1) 砂 粘・しまり弱
- 5-2. 暗青灰色 (5 BG4/1～3/1) 砂 粘・しまり弱に橙色 (7.5 YR6/6) 砂 粘・しまり弱が混じる
- 6-1. 橙色 (7.5 YR6/6) 砂 粘・しまり弱に暗青灰色 (5 BG4/1～3/1) 砂 粘・しまり弱がやや混じる
- 6-2. にぶい褐色 (7.5 YR5/4) ～明褐色 (7.5 YR5/6) 砂 粘・しまり弱
- 6-3. 明褐色 (7.5 YR5/6) 砂 粘・しまり弱
- 7. 明褐色 (7.5 YR5/6) ～褐色 (7.5 YR4/6) 砂 粘・しまり弱
- a. 黒褐色 (2.5 Y3/1) 砂 粘・しまり弱 (骨片、炭混じる)
- b. 明黄褐色 (2.5 YR6/6) 砂 粘・しまり弱 (長さ 1～3 cm の角礫を 50% 程度含む)
- c. 暗灰黄色 (2.5 Y4/2) ～オリーブ褐色 (2.5 Y4/3) 砂 粘・しまり弱に黒褐色 (2.5 Y3/1) 砂 粘・しまり弱 (骨片、炭混じる) が混じる
- d. 黒褐色 (2.5 Y3/1) 砂 粘・しまり弱 (骨片、炭混じる)
- e. 黒褐色 (2.5 Y3/1) 砂 粘・しまり弱 (骨片、炭混じる)
- f. 黒褐色 (2.5 Y3/1) 砂 粘・しまり弱 (骨片、炭混じる)
- g. 明赤褐色 (2.5 YR5/6) 砂 粘・しまりやや強 (長さ 1～5 cm の小礫を少量、古代末頃の遺物を多量に含む)
- h. 明赤褐色 (2.5 YR5/6) 砂 粘・しまりやや強 (長さ 1～5 cm の小礫を少量、古代末頃の遺物を多量に含む)
- i. 明赤褐色 (2.5 YR5/6) 砂 粘・しまりやや強 (長さ 1～5 cm の小礫を少量、古代末頃の遺物を多量に含む)
- j. 明赤褐色 (2.5 YR4/6) 砂 粘・しまりやや強 (長さ 1～5 cm の小礫を少量、古代末頃の遺物を多量に含む)
- k. 明黄褐色 (2.5 YR6/6) 砂 粘・しまり弱 (長さ 1～3 cm の角礫を 50% 程度含む)
- l. 明黄褐色 (2.5 YR6/6) 砂 粘・しまり弱 (長さ 1～3 cm の角礫を 50% 程度含む)
- m. 黄褐色 (10 YR5/6) 砂 粘・しまり弱 (鉄分を多く含む)
- n. 黒褐色 (2.5 Y3/1) 砂 粘・しまり弱 (骨片、炭混じる)
- o. 黒褐色 (2.5 Y3/1) 砂 粘・しまり弱 (骨片、炭混じる)
- p. 暗灰黄色 (2.5 Y4/2) ～オリーブ褐色 (2.5 Y4/3) 砂 粘・しまり弱に黒褐色 (2.5 Y3/1) 砂 粘・しまり弱 (骨片、炭混じる) が混じる

層は黒褐色を呈する砂層で、下層は褐色を呈する砂層である。上層から、鉄釘 23 点、不明鉄製品 22 点、焼けた人骨片が出土している。鉄釘は、巻頭で厚さ 0.2cm 程度、長さ 2.8～4.0cm の鉄釘が 9 点 (43～50) 出土しているほか、鍔で不明瞭であるが、厚さ 0.4cm、長さ 5.0～7.0cm のものも出土している。

019 火葬墓は、検出長約 1.2m、幅約 2.1m、深さ約 0.5m で、埋土は 018 火葬墓と同様である。埋土からは、黒色土器 B 類碗とみられる細片 (32) や不明土師器細片 2 点、焼けた人骨片が出土した。黒色土器は、極細片であり混入の可能性も考えられる。

020 火葬墓は、検出長約 1.4m、幅約 1.5m、深さ約 0.4m で、埋土は黒褐色単一砂層である。埋土からは、土師器小皿片 5 点、不明土師器細片 2 点、鉄釘 8 点、不明鉄製品 28 点が出土した。土師器小皿はいずれも回転台で成形されており、法量のわかるものは口径 12.5cm 程度、器高 2.6 cm のものが 2 点 (33・34)、口径 14.7cm、器高 3.1cm のものが 1 点 (35) である。底部の切り離しは全て回転糸切りでなされており、底部の一部に板目がつく。鉄釘は、全て厚さ 0.2～0.3 cm、長さ 3.4～5.2cm (51・52) である。時期は、土師器小皿の法量・調整からみて中世から近世とみられる。

021 火葬墓は、検出長約 0.8m、幅約 1.2m、深さ約 0.3m で、埋土は 2 層に分かれる。上層は、黒褐色を呈する砂層で焼けた人骨片が出土した。下層は褐色の砂層で、遺物は出土していない。

022 火葬墓は、検出長約 0.9m、幅約 0.8m、深さ約 0.4m で、埋土は黒褐色単一砂層である。埋土から黒色土器細片 1 点、不明土師器細片、焼けた人骨片が出土した。黒色土器は極細片のため、混入とみている。

023 火葬墓は、検出長約 1.2m、幅約 1.2m、深さ約 0.4m で、埋土は 022 火葬墓と同様であるが上下が逆転している。遺物は鉄釘が 4 点、不明鉄製品が 2 点、黒色土器細片が 1 点出土した。鉄釘は、鍔のため正確な法量はわからないが、厚さ 0.2cm 程度、長さ 3.0～4.0cm と推定される。黒色土器は極細片のため、混入とみている。

007 火葬土坑¹⁾ 007 火葬土坑は、検出長約 1.7m、幅約 2.0m で、深さ約 0.9m である。埋土は明褐色単一砂で、土坑壁面は赤褐色を呈し焼けたようにやや固くしまる。埋土からは、口径 8.8～9.0cm、器高 2.2～2.4cm で手づくね成形の土師器小皿 2 点 (27、28)、貝殻片 1 点、木細片 15 点、焼けた多量の人骨片が出土している。土坑壁面の状況からみて、この火葬土坑では茶毘にふされた後、そのまま墓として利用されたものと想定される。007 火葬土坑の時期は、出土した土師器小皿から決することは難しいが、法量・調整からみて中世から近世と推定される。

001 ピット 001 ピットは、調査区外へ広がるため一部を検出したにとどまるが、平面形は楕円形とみられ、検出長約 0.7m、幅約 0.5m と推定される。残存する深さは 0.18m で、埋土は黄褐色単一砂層を呈し鉄分を多く含む。遺物は出土していない。

029 列石状遺構 検出規模は、溝も含め長さ約 4.0m、幅約 3.0m で長方形を呈する。周辺の溝は広いところで検出長約 0.4m、深さ約 0.2m で、その内側には、一部不明瞭であるが石列がめぐる。石列は一系列で、長さ 20.0cm 程度の扁平な砂岩を 3 段小口積みで積み上げている。石列内には、長さ約 1.7m、幅約 0.8m の範囲で落ち込みがあり、埋土は上層の溝同様小礫を多く含む褐色砂層と下層のやや褐色を呈する砂層がある。ただし、下層第 b 層は周辺の第 c 層と極めて類似し、明確にわけるとは難しい状況であった。いずれの層からも遺物は出土せず、この列石状遺構の時期は明確でない。第 4 層以下の層序からみて、中世以前の遺構であると推定される。

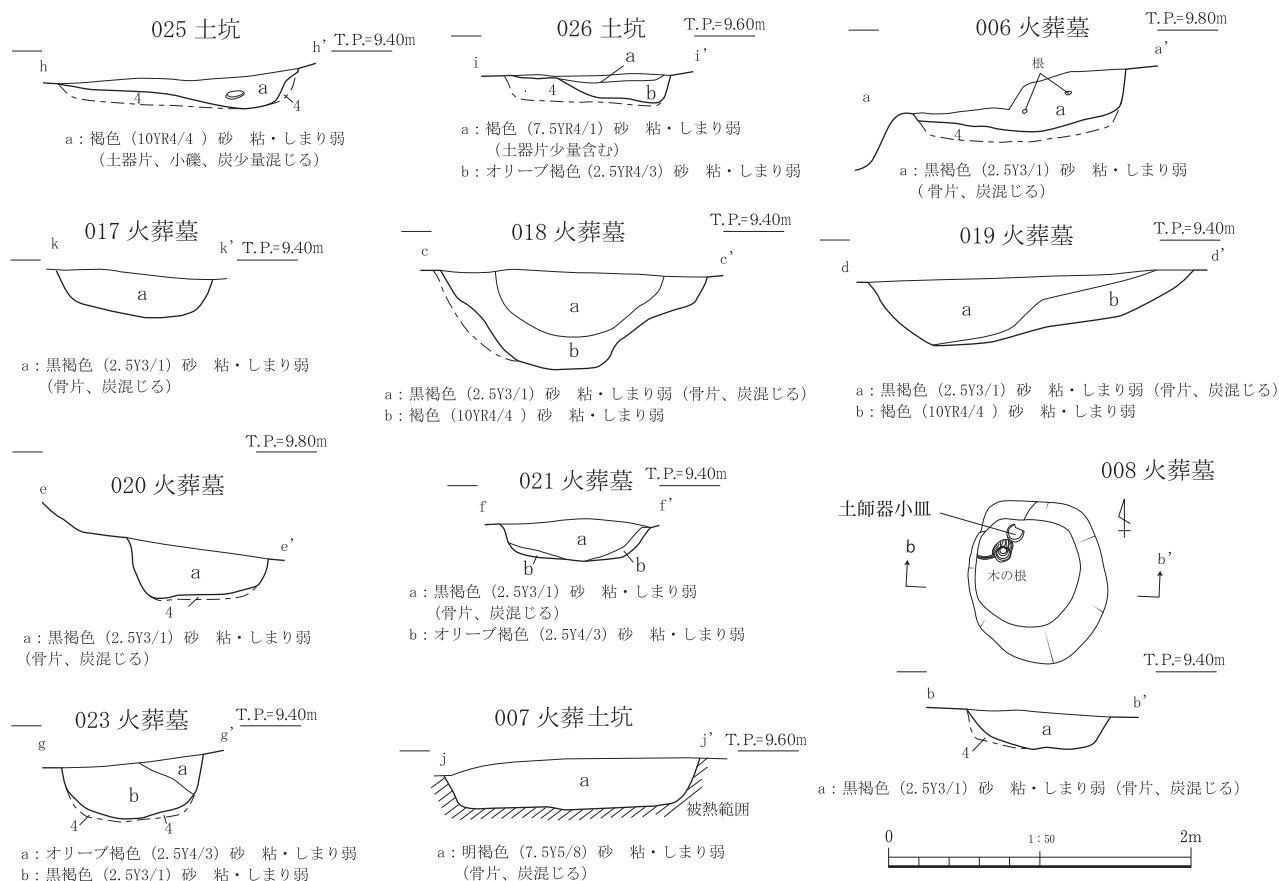


図 10 4 区個別遺構平面図及び土層断面図 (S=1/50)

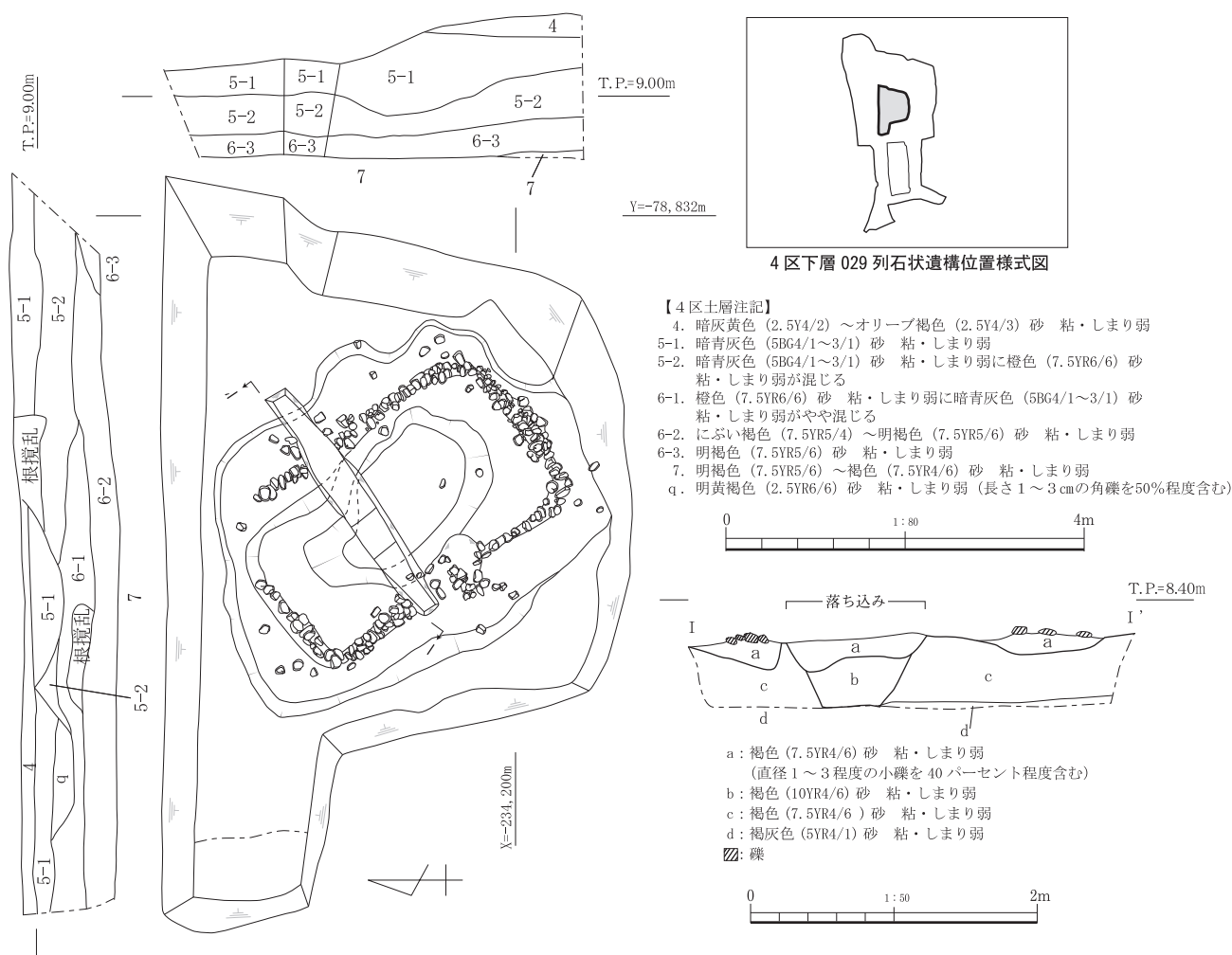


図 11 4 区下層 029 列石状遺構平面図及び土層断面図

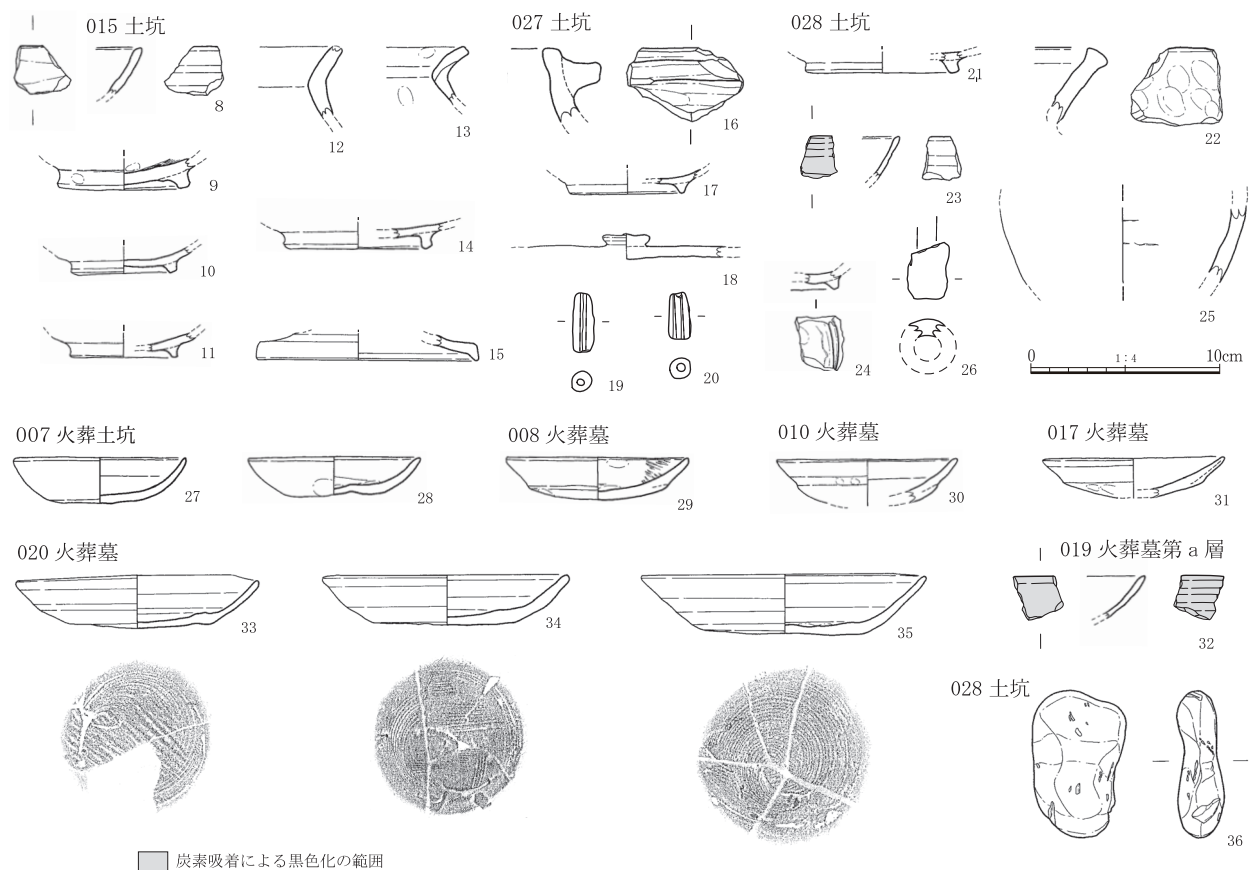


図 12 4区出土遺物①

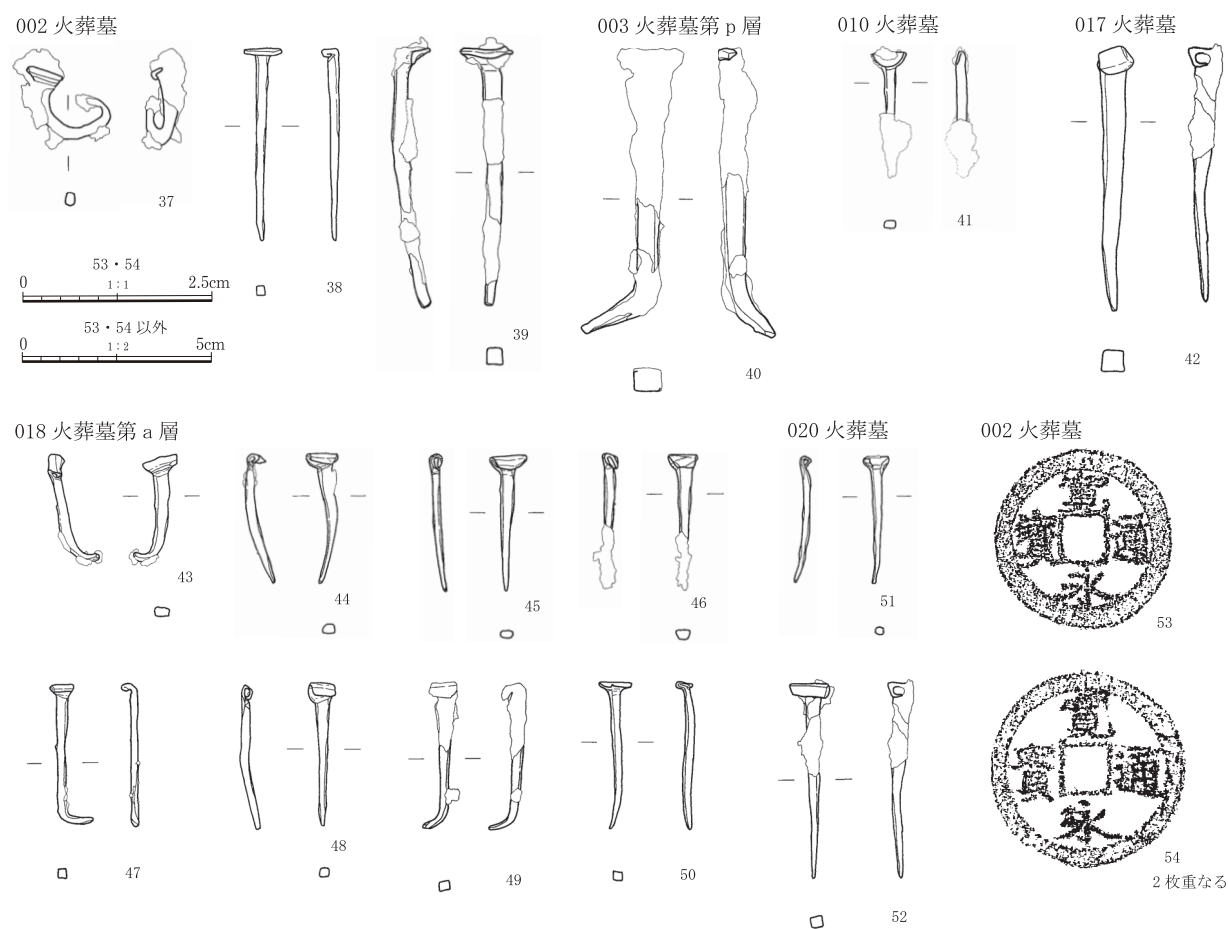


図 13 4区出土遺物②

第Ⅴ章 出土人骨の分析

公立大学法人

大阪市立大学大学院医学研究科

分子生体医学大講座 器官構築形態学

学術博士 安部 みき子

吉原遺跡は和歌山県日高郡美浜町に位置し、中世から近世の火葬墓が多数検出されている。火葬墓から出土した骨は全て焼骨であり、高温で焼かれたため白色化するとともにクラックが生じ碎片のものが多く、部位の同定ができるものは少なかった。したがって、各遺構内の最小個体数の推定は不可能であり、性の判定や年齢の詳細な推定はできなかった。

・ 1 区

001 火葬墓から出土した焼骨は、頭骨の左側頭骨錐体、下顎骨の左側第 3 大臼歯歯槽周辺部と椎骨の椎体の一部が同定できた。椎体は辺縁に骨増殖が見られ、老齢であったことをうかがわせる。その他の火葬骨は小片となっていた。

・ 2 区

人骨は 001、003、004、005 火葬墓の 4 基から出土し、出土部位は頭骨から四肢骨までの小片であるが、骨片の厚さ等からいずれも成人と推定される。

・ 4 区

人骨は 002～007、010、017～021、023 火葬墓から出土しており、002、006、020 火葬墓は出土数が少なかった。それ以外の 10 基の遺構からは頭骨と四肢骨の破片が多数出土した。018 火葬墓から出土した頭骨片の厚みがやや薄く、若い個体の可能性がある。また、004 火葬墓と 010 火葬墓から出土した椎骨の椎体には辺縁に骨増殖が見られ、老齢個体と推測される。

007 火葬土坑からは軸椎（第 2 頸椎）の歯突起が出土している。四肢骨は多数出土し、部位の同定が可能なものも見られた。

表1 人骨部位同定表

地区	遺構	年齢	性別	出土部位	備考
1区	001	成人	不明	側頭骨;左錐体, 下顎骨;左第3大臼歯歯槽周辺, 頭骨片;多数, 椎骨;椎体の一部, 尺骨;左鈎状突起周辺, 第1中手骨;骨頭, 長骨片;多数(大腿骨, 脛骨, 腓骨, その他)	椎体の辺縁に骨増殖あり(老齢)
2区	001	成人	不明	側頭骨;左錐体の内耳孔周辺遺存, 頭骨片多数, 椎骨;頸椎?, 上腕骨;右肘窩上縁遺存, 第2中手骨?;右近位端の一部, 大腿骨;粗線の一部, 中足骨?;遠位端の一部, 長骨片;多数	
2区	003	成人	不明	下顎骨;左第3大臼歯歯槽の外側部, 頭骨片, 長骨片;多数 上腕骨, 尺骨, 橈骨, 大腿骨, 脛骨等の一部, その他	
2区	004	成人	不明	側頭骨;左錐体, 長骨片;多数(大腿骨, 脛骨, 腓骨, その他)	
2区	005	成人	不明	長骨片;多数(上腕骨, 尺骨, 橈骨, 大腿骨, 脛骨等の一部, その他)	
4区	002	成人	不明	長骨片;少量	
4区	003	成人	不明	頭骨片;約30, 大腿骨;骨幹約2cm, 腓骨;骨幹約7cm、長骨片;多数(上腕骨, 尺骨, 橈骨, 大腿骨, 脛骨等の一部, その他)	
4区	004	成人	不明	左頬骨, 側頭骨;右下顎窩周辺, 頭骨片;多数, 椎骨;5, 肩甲骨;右関節窩周辺, 寛骨;腸骨の大坐骨切痕周辺、長骨片;多数(上腕骨, 尺骨, 橈骨, 大腿骨, 脛骨等の一部, 骨頭の破片8点, その他)	椎体やや骨増殖
4区	005	成人	不明	頭骨片;8, 長骨片;多数(上腕骨, 尺骨, 橈骨, 大腿骨, 脛骨等の一部, その他)	
4区	006	成人	不明	長骨片;少量	骨がやや細い
4区	007	成人	不明	側頭骨;右頬骨突起, 錐体, 下顎骨;右下顎頭, 下顎歯槽の一部に左第2切歯～第2小臼歯が釘植, 左下顎頭, 左中切歯～右犬歯歯槽, 右第3大臼歯歯槽～下顎枝前縁, 下顎骨片 1, 頭骨片;約20, 椎骨;軸椎;歯突起, 上関節突起部, 肩甲骨;右肩甲棘基部, 上腕骨;骨頭, 上腕骨?;骨幹約10cm, 橈骨;左近位部, 大腿骨;骨頭, 右小転子周辺部, 遠位端, 長骨片;多数(上腕骨, 尺骨, 橈骨, 大腿骨, 脛骨等の一部, その他)	
4区	010	成人	不明	左頬骨, 側頭骨;右乳様突起と錐体の一部、左乳様突起, 頭骨片;多数, 椎骨;環椎の右側のみ, 頸椎の椎弓, 胸椎の椎体, 腰椎の椎体, 長骨片;5	椎体の辺縁に骨増殖あり(老齢)
4区	017	成人	不明	上顎骨;左中切歯～右第1小臼歯までの歯槽, 頭骨片多数, 長骨片;多数 上腕骨, 尺骨, 橈骨, 大腿骨, 脛骨等の一部, その他	
4区	018	成人	不明	側頭骨;左錐体, 頭骨片;多数, 長骨片;少量, 不明 1点	頭骨片の厚みがやや薄い(若い?)
4区	019	成人	不明	歯根;1, 上顎骨;左第2・3大臼歯の歯槽のみ, 頭骨片;3, 膝蓋骨;左右不明 1, 長骨片;多数(大腿骨, 脛骨, 腓骨, その他)	
4区	020	成人	不明	頭骨片;頭頂部 3, 長骨片;脛骨, その他,	
4区	021	成人	不明	側頭骨;左下顎窩と外耳孔の一部, 頭骨片多数, 腸骨?;大坐骨切痕?, 長骨片;多数 大腿骨, 脛骨, 腓骨, その他	
4区	023	成人	不明	側頭骨;右下顎窩～外耳孔の上縁と錐体, 左頬骨, 右頬骨, 上顎骨;歯槽の一部, 下顎骨;左第2・3大臼歯歯槽の上部～筋突起破損の下顎枝, 頭骨片;多数, 椎骨;椎弓の一部 2, 長骨片;多数(上腕骨, 尺骨, 橈骨, 大腿骨, 脛骨等の一部, その他)	

第Ⅵ章 まとめ

今回の調査では、奈良時代から平安時代の土坑 9 基、中世以前の列石状遺構 1 基、中近世の火葬墓 24 基・土坑 1 基、時期不明のピット 3 基を確認した。

奈良時代から平安時代の土坑は、3・4区で確認されておりいずれも埋土が類似する。これらの土坑は、今回遺構として扱ったが、出土遺物が土器細片ばかりであることや4区 027 土坑からレンガ片のような細片が出土していることから、調査区東側に位置する江戸時代に掘削された新川の排土である可能性も完全には否定できない。

4区では、火葬墓等検出遺構面である第4層より下層で列石状遺構を検出した。列石状遺構は、一列で、長さ 20.0cm 程度の扁平な砂岩を3段小口積みで積み上げている。周囲には溝をもち、列石中央には落ち込みがあるものの、埋土から遺物等の出土はなく、時期や性格はわからなかった。

火葬墓は全ての調査区で確認され、広範囲に分布することがわかった。調査区が狭く、全形がわかるものは少ないが、規模は長さ 0.8～1.2m、幅 1.2～2.1m 程度とみられ、深さ 0.4m 程度と残存状況は良い。平面形は、主に円形又は楕円形がみられる。全ての火葬墓の埋土は、灰を含む黒褐色を呈し、そこから焼けた人骨片が出土した。火葬墓によっては、埋土より焼けた人骨片に加えて、土師器小皿や鉄釘、古寛永銭、炭、木片等が出土した。各火葬墓は、墓壇に火を被けて焼け固まった状況がみられないことから、各遺構で茶毘にふされたものではないと考えられる。また、遺構の中には焼けた人骨が明瞭にまとまった状態で出土するものがあることやほぼ全ての火葬墓で鉄釘が出土することから、各埋葬場所とは別の場所で木棺等を用いて茶毘にふされたのち、有機質である木櫃又は布といった残存しにくいものに収納され、1箇所に埋納されたものと想定される。4区 008・009・019・021 火葬墓のように鉄釘が出土しないものについては、木棺を使用せず茶毘にふされ、布や散骨のような直葬であったかもしれない。

一方で、4区 007 火葬土坑は、遺構壁面が赤く焼けている点が特徴的で、この遺構では茶毘にふされ、そのまま墓として利用されたものと考えられる。

またこれらの火葬墓・土坑から出土した人骨の分析を依頼したところ、被葬者の年齢や性別を明確にするには至らなかったが、007 火葬土坑でのみ軸椎（喉仏）が出土していることが判明した。全形を確認した火葬墓等が少ないことから断定はできないが、軸椎（喉仏）の有無は、こうした利用状況の差異を反映するのかもしれない。

出土遺物から時期が推定できる火葬墓・土坑は、古寛永銭が出土し、江戸時代とみられる2区 005 火葬墓や4区 002 火葬墓、時期幅が広いが、土師器小皿が出土し、法量・調整から中近世とみられる4区 008 火葬墓や 010 火葬墓、017 火葬墓、007 火葬土坑がある。こうした遺物が出土した火葬墓等の状況は、出土していない火葬墓と埋土の色調や鉄釘の出土状況等極めて類似している。そのため、これらは近い時期にあるものと推定でき、全ての火葬墓・土坑は中近世のものである可能性が高いと考えられる。

吉原遺跡では、これまでの調査により今回の調査地北側は弥生時代から平安時代の墓域であったことがわかっている。今回の調査により、それ以降である中世から近世においても、立地を海側へと移動させながらも引き続き墓域として利用されていたことが新たに判明した。また、平安時代から近世にかけての墓が、全て火葬墓であることは注目される。しかしながら、こうした火葬を当該地域で行っていた背景は定かではない。近畿他地域の事例²⁾を参考とするならば、墓域

選定にあたっては平安時代に造営されたとみられる松原経塚を契機として当該地域周辺が聖地化され、墓域とされた可能性が想定されるにとどまる。また、火葬を採用した背景としては、当地域周辺の小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡にて13世紀中頃から後半代には浄土宗(系)の寺の存在が窺われることや南北朝時代である興国4年1月13日の原本を文明5年6月8日に写した西円寺名帳に「〈ヨシハラノ〉ヨネ女」「〈ヨシハラノ〉ヒコ九郎」(和歌山県史編さん委員会1983)とみえることから、当地に初期真宗門徒がいたことが知れるなど、仏教宗派が一要因として想定されよう。

【註】

- 1) こうした茶毘にふすための遺構は、この他、中世の遺構では「火葬場」、近世の遺構では「火葬場」、「火葬施設(茶毘跡)」などと呼称されることもある(土生田2013)。
- 2) 詳細は西口2009を参照。

【参考文献】

・土器編年の参考文献

- 小笠原好彦・西弘海 1976「2. 土器」『平城京発掘調査報告書Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊
奈良国立文化財研究所 他
- 川崎雅史編 2006「5. 高田土居跡から出土した土器」『高田土居跡・徳蔵地区遺跡・大塚遺跡―県道上富田南部線道路改良工事に伴う発掘調査報告書―』(財)和歌山県文化財センター
- 渋谷高秀 1987「紀伊、11～14世紀、日常雑器類の編年―有田郡を中心にして―」『和歌山県埋蔵文化財情報』17 和歌山県文化財研究会
- 武内雅人 1985「和歌山県における9世紀から11世紀の土器―紀伊にみられる律令的土器様式の終焉と中世的土器様式の成立―」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ 日本中世土器研究
- 藤井保夫他 1985「第4章 出土遺物の考察」『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書―海南湯浅道路建設に伴う関連遺跡発掘調査』和歌山県教育委員会
- 百瀬正恒・近江俊秀 1995「7. 近畿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

・銅銭編年の参考文献

- 川根正教 2001「寛永通宝銅銭の様式分類」『出土銭貨研究』出土銭貨研究会

・本文中の参考文献

- 青木繁他編 1993『建築大辞典』第2版 彰国社
- 川崎雅史編 2016『小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡―湯川中学校改築工事に伴う発掘調査報告書―』(公財)和歌山県文化財センター
- 御坊市史編さん委員会 1981『御坊市史』第1巻 通史編Ⅰ 御坊市
- 武内里三編 1985『角川日本地名大辞典 30 和歌山県』角川書店
- 西口圭介 2009「近畿の中世墓」『日本の中世墓』高志書院
- 福本都治 2002「和釘から洋釘へ―製釘技術の転換―」『住と建築』VOL.497 (社)全日本建築士会
- 平凡社 1983『和歌山県の地名 日本歴史地名大系 31』
- 美浜町史編集委員会 1988『美浜町史』上巻 美浜町
- 森彦太郎編 1970『日高郡誌』上巻 名著出版
- 和歌山県紀伊風土記の丘 2012『紀伊弥生文化の至宝』
- 和歌山県史編さん委員会 1983『和歌山県史 中世資料』第2巻 和歌山県

出土遺物観察表（土器）

報告書 番号	道跡名 地区	遺構	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	胎土	焼成	色調	備考
8	4区 J10・i2	015	土師器	皿又は 椀	—	(2.5)	—	口縁部 5%以下	密 赤色粒少量混じる	良好	内) 7.5YR6/4(にぶい橙) 外) 10YR6/4(にぶい黄橙) 断) 7.5YR6/4(にぶい橙)	外面に多段横ナデ技法
9	4区 J10・i2	015	土師器	高台付 坏か	—	(1.7)	(6.8)	10%以下	密	良	内) 7.5YR7/4(にぶい橙) 外) 7.5YR7/4(にぶい橙) 断) 7.5YR7/3(にぶい橙)	反転復元 貼り付け高台
10	4区 J10・i2	015	土師器	高台付 皿又は 坏	—	(1.4)	(5.5)	底部 15%	密	良好	内) 10YR7/6(明黄褐) 外) 10YR7/4(にぶい黄橙) 断) 10YR5/1(褐灰)～ 10YR7/4(にぶい黄橙)	反転復元 貼り付け高台
11	4区 J10・i2	015	土師器	高台付 皿又は 坏	—	(1.3)	(5.6)	底部 10%	密	良好	内) 10YR7/4(にぶい黄橙) 外) 10YR7/4(にぶい黄橙) 断) 10YR7/4(にぶい黄橙)	反転復元 貼り付け高台
12	4区 J10・i2	015	土師器	甕	—	(3.7)	—	口縁部 5%以下	密 1mm大の黒粒石含む、3mm大 の黒粒石少量含む	良好	内) 2.5YR4/6(赤褐) 外) 10R5/6(赤) 断) 2.5YR4/6(赤褐)	
13	4区 J10・i2	015	土師器	甕	—	(3.0)	—	口縁部 5%以下	密 1～5mm大の石英、黒色粒を 多く含む	良好	内) 2.5YR6/4(にぶい橙) 外) 5YR5/3(にぶい赤褐)～ 10YR4/1(褐灰) 断) 2.5YR6/4(にぶい橙)	
14	4区 J10・i2	015	黒色土器	椀か	—	(1.4)	(7.7)	底部 25%	密 石英0.1mm大微量含む	良好	内) N3/0(暗灰) 外) 7.5YR7/6(橙) 断) 2.5YR4/1(黄灰)～ 10YR7/4(にぶい黄橙)	黒色土器A類 反転復元 貼り付け高台
15	4区 J10・i2	015	須恵器	高杯	—	(1.4)	(11.6)	脚部 5%	緻密	良好	内) N6/ (灰) 外) N6/ (灰) 断) N5/ (灰)	反転復元
16	4区 J10・i1	027	土師器	羽釜か	—	(3.9)	—	5%以下	密 1mm大の赤色粒を含む 1～2mm大の石英少量含む	良好	内) 2.5Y7/3(浅黄) 外) 2.5Y7/3(浅黄) 断) 10YR7/4(にぶい黄橙)	
17	4区 J10・i1	027	黒色土器	椀	—	(1.2)	(6.0)	底部 5%	密 石英1mm大少量混じる	良好	内) N3/0(暗灰) 外) 7.5YR7/4(にぶい橙) 断) 2.5Y7/3(浅黄)	黒色土器A類 反転復元
18	4区 J10・i1	027	須恵器	杯蓋	—	(1.3)	—	10%	緻密 石英粒で少量含む	良好	内) N7/0 (灰白) 外) N5/0 (灰) 断) N7/0 (灰白)	反転復元
19	4区 J10・i1	027	土製品	土鉢	—	3.1	—	100%	密	良好	外) 10YR7/6(明黄褐)	重量3.46g
20	4区 J10・i1	027	土製品	土鉢	—	2.4	—	100%	密	良好	外) 10YR8/4(浅黄橙)	重量2.36g
21	4区 J10・i2	028	土師器	高台付 皿又は 坏	—	1.1	8.0	底部 5%以下	密	良好	内) 10YR7/4(にぶい黄橙) 外) 10YR7/4(にぶい黄橙) 断) 10YR7/4(にぶい黄橙)	貼り付け高台
22	4区 J10・i2	028	土師器	鍋?	—	(4.0)	—	口縁部 5%以下	密 1mm～5mm大の石英、長石・ 雲母含む	良	内) 7.5YR7/4(にぶい橙) 外) 7.5YR7/4(にぶい橙) 断) 7.5YR7/4(にぶい橙)	
23	4区 J10・i2	028	黒色土器	椀か	—	(2.3)	—	口縁部 5%	密 赤色粒少量含む	良好	内) N3/ (暗灰) 外) 5YR6/6(橙) 断) 10YR7/4(にぶい黄橙)	黒色土器A類
24	4区 J10・i2	028	黒色土器	椀か	—	0.9	—	底部 5%	密 1～2mm大の長石、赤色粒少 量含む	良	内) N3/ (暗灰) 外) 10YR7/4(にぶい黄橙) 断) 10YR7/4(にぶい黄橙)	黒色土器A類
25	4区 J10・i2	028	須恵器	壺	—	(4.0)	—	体部 5%以下	密 1mm大石英、長石少量含む	良好	内) N6/0 (灰) 外) N5/0 (灰) 断) 7.5YR5/2 (灰褐)	
26	4区 J10・i2	028	土製品	土鉢か	—	(2.9)	—	10%	密	良好	内) 5Y8/1 (灰白) 外) 5Y8/1 (灰白)～ 5Y7/1(灰白) 断) 5Y8/1 (灰白)	重量6.70g
27	4区 J10・k1,2	007	土師器	小皿	9.0	2.4	5.1	100%	緻密 赤色粒、黒色粒φ1mm程度少 量混じる	良好	内) 7.5YR8/4(浅黄橙) 外) 7.5YR8/4～10YR8/4(浅 黄橙) 断) 10YR8/2(灰白)	手づくね成形
28	4区 J10・k1,2	007	土師器	小皿	8.8	2.2	5.1	100%	緻密 φ1mm以下の長石、φ1mm程 度の黒色粒混じる	良好	内) 5YR7/4(にぶい橙) 外) 5YR7/6(橙) 断) 5YR7/4(にぶい橙)	手づくね成形
29	4区 J9・k25	008	土師器	小皿	9.6	2.2	6.9	80%	緻密 赤色粒、極小粒の石英少量 混じる	良好	内) 7.5YR8/4(浅黄橙) 外) 7.5YR8/4(浅黄橙)	手づくね成形
30	4区 J9・k24	010	土師器	小皿	(9.4)	(2.3)	(7.4)	10%	緻密 1mm大の礫粒微量含む	良好	内) 7.5YR7/4(にぶい橙) 外) 7.5YR7/4(にぶい橙) 断) 10YR8/3(浅黄橙)	手づくね成形 反転復元
31	4区 —	017	土師器	小皿	(9.4)	(2.1)	(7.3)	40%	緻密	良好	内) 5Y6/2(灰オリーブ) 外) 5Y7/2(灰白)釉 5Y5/1(灰) 断) 5Y6/1(灰)	手づくね成形? 反転復元
32	4区 —	019	黒色土器	椀か	—	(2.3)	—	口縁部 5%	密 長石2mm大、赤色粒を少量含む	良好	内) 10YR4/1(褐灰) 外) 10YR4/1(褐灰) 断) 10YR4/1(褐灰)	黒色土器B類
33	4区 J10・k1	020	土師器	皿	12.5	2.7	7.5	90%	緻密 石英、礫極小粒で少量混じ る	良好	内) 10YR8/4(浅黄橙) 外) 2.5Y7/3(浅黄)	拓本あり
34	4区 J10・k1	020	土師器	皿	12.6	2.6	7.4	90%	緻密 赤色粒、石英を極少量含む	良好	内) 5YR7/6(橙) 外) 10YR7/4(にぶい黄橙)	回転台成形 拓本あり
35	4区 J10・k1	020	土師器	皿	14.7	3.1	8.4	100%	緻密 3mm大の礫を少量含む	良好	内) 2.5Y8/4(淡黄) 外) 2.5Y8/4(淡黄)	回転台成形 拓本あり

出土遺物観察表(鉄製品)

報告書 番号	遺跡名 地区	グリッド	遺構	寸 法					重量 (g)	備考
				長	幅	厚み	幅(頭)	幅(胴)		
1	1区	—	001	3.2	3.1	0.65	—	—	2.78	
2	2区	—	001	3.2	—	0.25	0.5	0.25	0.80	
3	2区	—	001	3.3	—	0.25	0.6	0.35	1.11	
4	2区	—	001	3.45	—	0.2	0.95	0.2	1.42	
5	2区	—	001	4.2	—	0.25	0.65	0.25	1.44	
6	2区	—	001	4.21	—	0.3	1.1	0.3	1.56	
37	4区 J10・m2	J10 m2	002	2.4	—	0.3	1.0	0.25	1.79	
38	4区 J10・m2	J10 m2	002	5.0	—	0.25	1.0	0.25	1.95	
39	4区 J10・m2	J10 m2	002	7.0	—	0.4	1.4	0.45	4.94	
40	4区 J10・02	J10 02	003	7.4	—	0.7	1.8	0.7	16.38	
41	4区 J9・k24	J9 k24	010	3.4	—	0.2	0.9	0.4	1.58	
42	4区 J10・k1	J10 k1	017	6.9	—	0.55	0.9	0.65	9.40	
43	4区 J10・k, 025	J10 k, 025	018	2.9	—	0.2	0.9	0.4	1.65	
44	4区 J10・k, 025	J10 k, 025	018	3.4	—	0.25	0.8	0.4	1.25	
45	4区 J9・k, 025	J9 k, 025	018	3.5	—	0.2	0.95	0.3	1.10	
46	4区 J10・k, 025	J10 k, 025	018	3.5	—	0.25	0.8	0.4	1.31	
47	4区 J10・k, 025	J10 k, 025	018	3.65	—	0.2	0.6	0.2	1.07	
48	4区 J10・k, 025	J10 k, 025	018	3.7	—	0.25	0.7	0.25	1.37	
49	4区 J9・k, 025	J9 k, 025	018	3.8	—	0.2	0.75	0.25	1.72	
50	4区 J10・k, 025	J10 k, 025	018	3.8	—	0.2	0.85	0.25	1.29	
51	4区 J10・k1	J10 k1	020	3.4	—	0.2	0.75	0.2	0.62	
52	4区 J10・k1	J10 k1	020	5.2	—	0.3	1.2	0.3	2.48	

出土遺物観察表(銅製品)

報告書 番号	遺跡名 地区	グリッド	遺構	寸 法					重量 (g)	備考
				直径	穿辺長	厚み	—	—		
7	2区	—	005	φ 2.6	内0.6	0.1	—	—	3.12	「寛永通寶」
53	4区 J10・m2	J10 m2	002	φ 2.4	内0.6	0.1	—	—	2.66	「寛永通寶」
54	4区 J10・m2	J10 m2	002	φ 2.3	内0.6	0.1	—	—	7.46	「寛永通寶」 2枚重なる

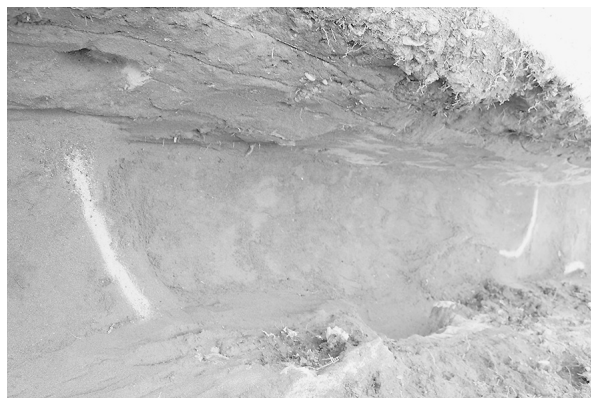
出土遺物観察表(石製品)

報告書 番号	遺跡名 地区	グリッド	遺構	器種	寸 法			重量 (g)	残存率	石材	備考
					幅	長	厚さ				
36	4区 J10・i2	J10 i2	028	敲き石 又は錘	4.9	7.7	2.45	114.8	100%	砂岩	色調 2.5Y6/2(灰黄) 焼)7.5YR6/4(にぶい橙)

写真図版



1区 全景(東から)



1区 001 火葬墓(北から)



1区 002 火葬墓(北から)



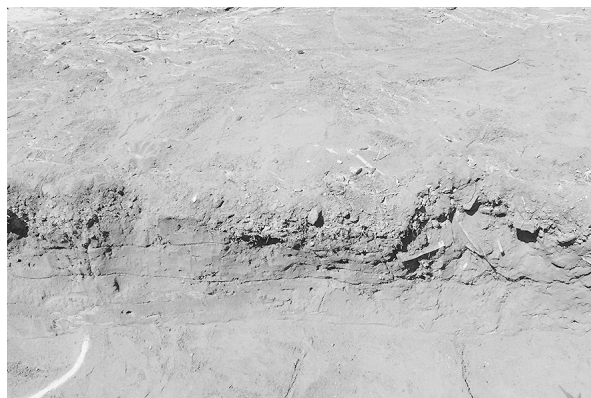
1区 003ピット



1区 北壁土層断面①



1区 北壁土層断面②



1区 北壁土層断面③



2区 全景(東から)



2区 001 火葬墓(南から)



2区 002 火葬墓(南から)



2区 006 ピット(南から)



2区 003 火葬墓(南から)



2区 004 火葬墓(南から)



2区 005 火葬墓(南から)



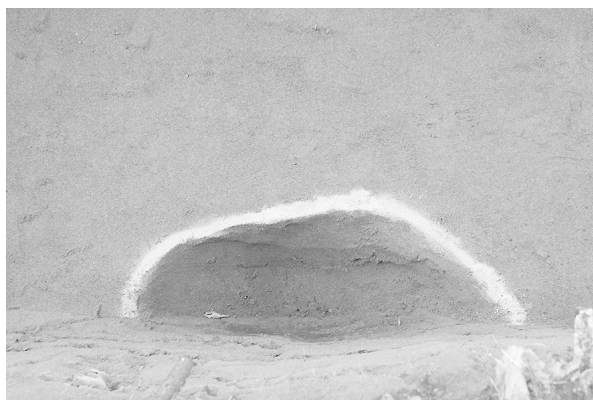
2区 南壁土層断面



3区 全景(東から)



3区 001 火葬墓、003 土坑(東から)



3区 001 火葬墓(南から)



3区 北壁土層断面①



3区 北壁土層断面②



3区 南壁土層断面



4区 全景西半(南から)



4区 全景東半(西から)



4区 南壁土層断面①



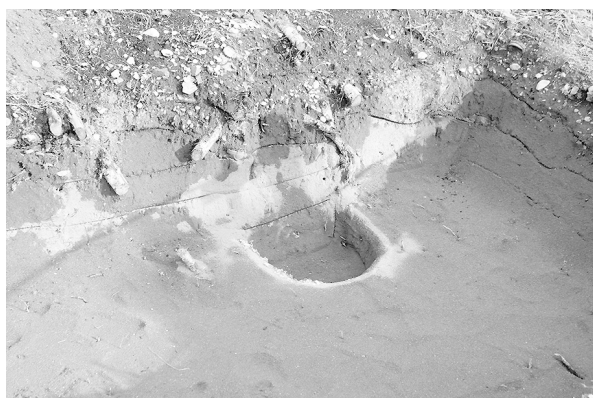
4区 南壁土層断面②



4区 南壁土層断面③



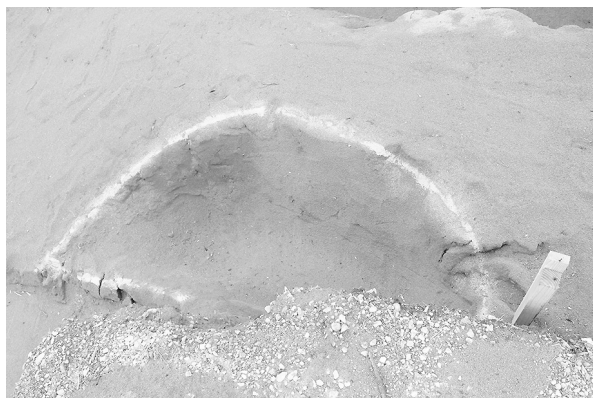
4区 西壁土層断面



4区 001 ピット(西から)



4区 002 火葬墓(北から)



4区 003 火葬墓(北から)



4区 014・015・028土坑(西から)



4区 007 火葬土坑土層断面(西から)



4区 008 火葬墓土層断面(南から)



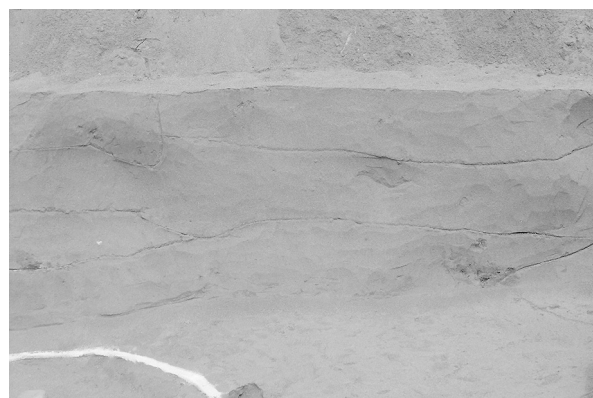
4区 018 火葬墓土層断面(南から)



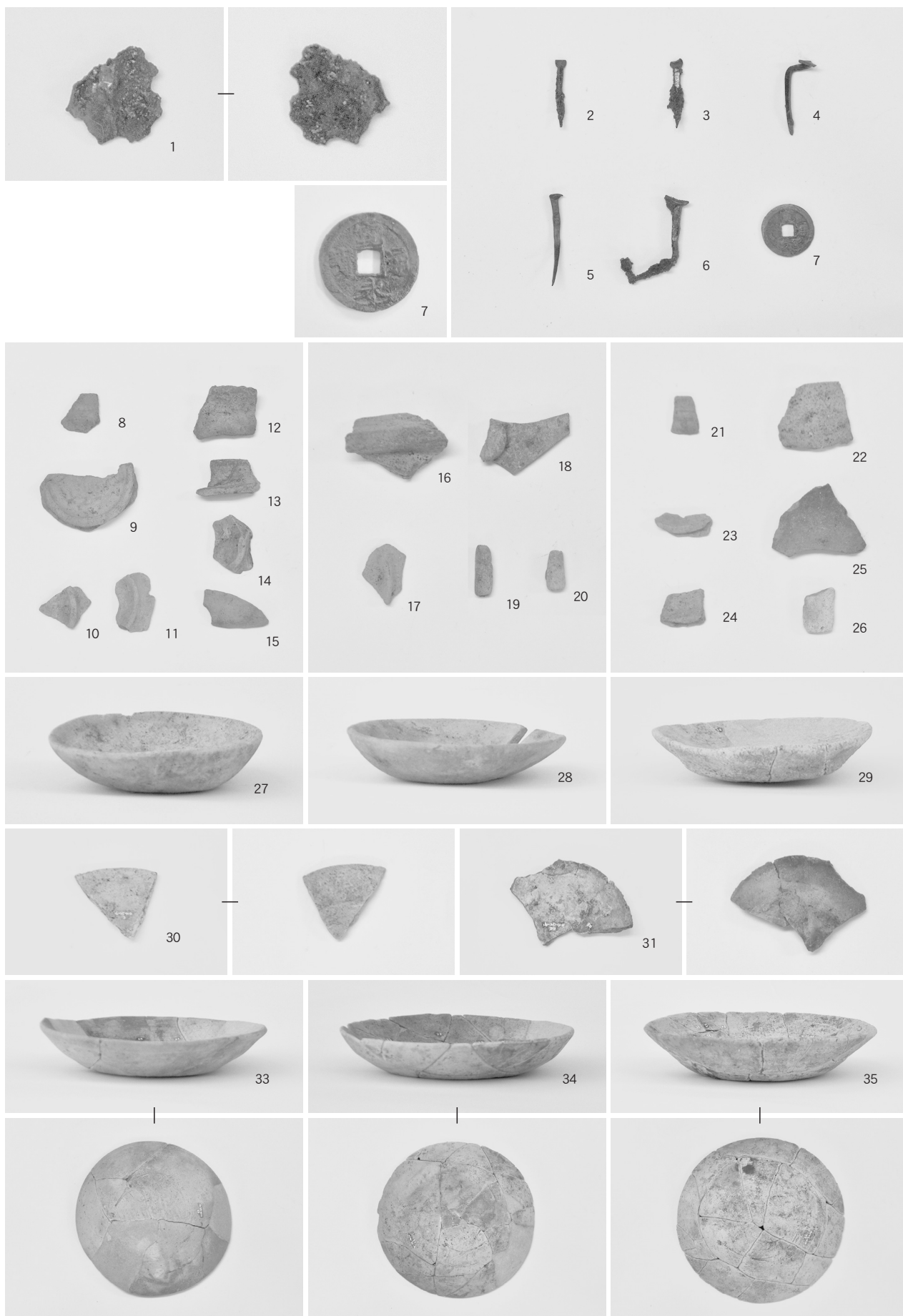
4区 023 火葬墓土層断面(南から)

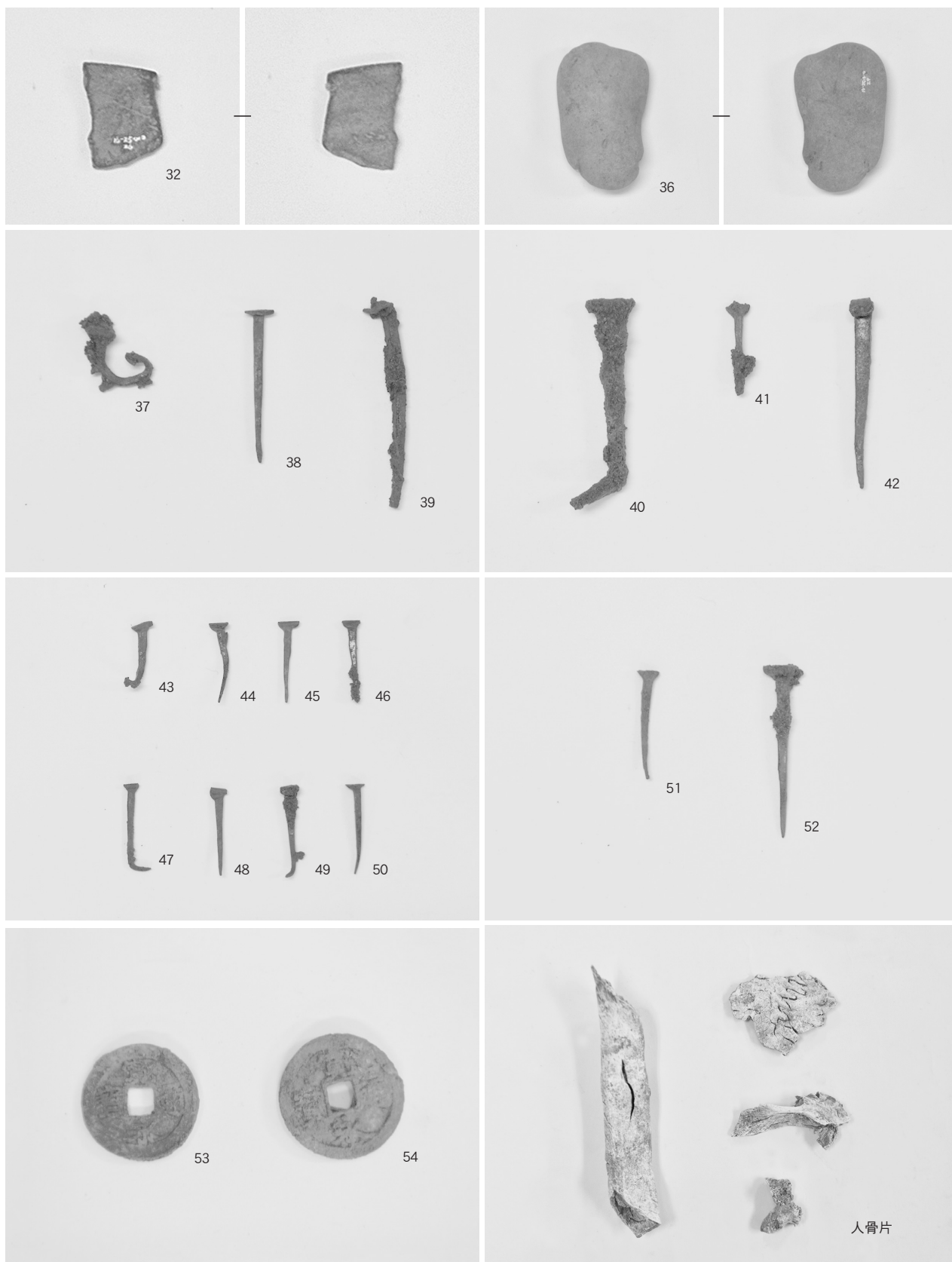


4区 石列状遺構(北西から)



4区 北壁土層断面





報告書抄録

ふりがな	よしはらいせき							
書名	吉原遺跡							
副書名	都市防災総合推進事業に伴う発掘調査報告書							
編著者名	金澤 舞							
発行機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒 640-8301 和歌山県和歌山市岩橋1263番地の1 TEL 073-472-3710							
発行年月日	西暦 2017年 2月 17日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
よしはらいせき 吉原遺跡	ひだかぐんみはまちよう 日高郡美浜町 よしはら 吉原	30381	10	33° 53′ 7″ 付 近	135° 8′ 53″ 付 近	2016. 8. 4～ 2016. 9. 27	406. 2m ²	都市防災総合推進事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
吉原遺跡	墓域	奈良時代 ～平安時代	土坑		土師器、須恵器、黒色土器等			
		中世以前	列石状遺構		なし			
		中世～近世	火葬墓・土坑		土師器、鉄釘、古寛永銭、焼けた人骨片等			
要 約	都市防災総合推進事業に伴い、吉原遺跡では4箇所面積計406.2㎡を調査した。検出した遺構は、奈良時代～平安時代の土坑9基、中世以前の列石状遺構1基、中近世の火葬墓・土坑25基、時期不明のピット3基である。これまでの調査で今回の調査地より北側では弥生時代から平安時代の墓域であったことがわかっている。今回の調査により、それ以降である中近世についても、立地を海側へと移動させながらも引き続き火葬墓の墓域として利用されていたことが新たに判明した。							

都市防災総合推進事業に伴い、吉原遺跡では4箇所面積計406.2㎡を調査した。検出した遺構は、奈良時代～平安時代の土坑9基、中世以前の列石状遺構1基、中近世の火葬墓・土坑25基、時期不明のピット3基である。これまでの調査で今回の調査地より北側では弥生時代から平安時代の墓域であったことがわかっている。今回の調査により、それ以降である中近世についても、立地を海側へと移動させながらも引き続き火葬墓の墓域として利用されていたことが新たに判明した。

吉原遺跡

—都市防災総合推進事業に伴う発掘調査報告書—

2017年2月17日

編集・発行：公益財団法人 和歌山県文化財センター

〒640-8301 和歌山県和歌山市岩橋1263番地の1

印刷・製本：初田印刷株式会社